第2節　吉田構内（吉田遺跡）の調査

1．獣医学国際教育研究センター新営工事に伴う本発掘調査

調査地区　吉田構内P-17区

調査面積　608㎡

調査期間　平成25年8月5日～10月7日

調査担当　横山成己　石丸恵利子

調査結果

（1）調査の経緯（図4、写真30・31）

吉田構内連合獣医学研究棟東側駐車場敷地において、獣医学国際教育研究センター棟の新営工事が計画された。

周辺地での既往の調査成果を見ると、平成3年度から平成4年度にかけて計画地の西隣にて実施した連合獣医学研究棟新営に伴う試掘[註1]・事前調査[註2]では、縄文時代の遺物を包含する河川の右岸部が検出されており、平成23年度に計画地の北隣にて実施した特高受変電設備棟新営に伴う本発掘調査では、平安時代後期から鎌倉時代の遺物を包含する南東－北西方向に走る河川が検出されている。

このことから、工事予定地内に埋没河川が存在する可能性が極めて高いと予想されたため、本発掘調査を実施し、埋蔵文化財の確認を行う運びとなった（平成24年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会にて承認）。調査においては、新営建物基礎の外周を覆う範囲を対象に、東西28.9m、南北21.05mの608.345㎡の調査区を設定した。

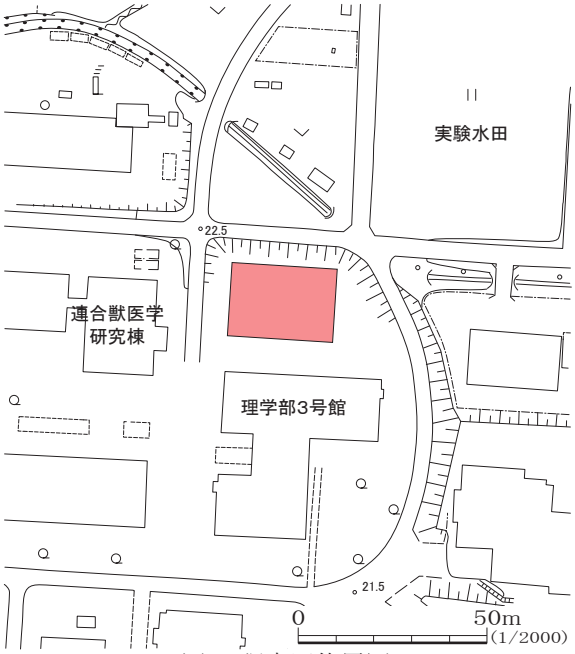


図4　調査区位置図

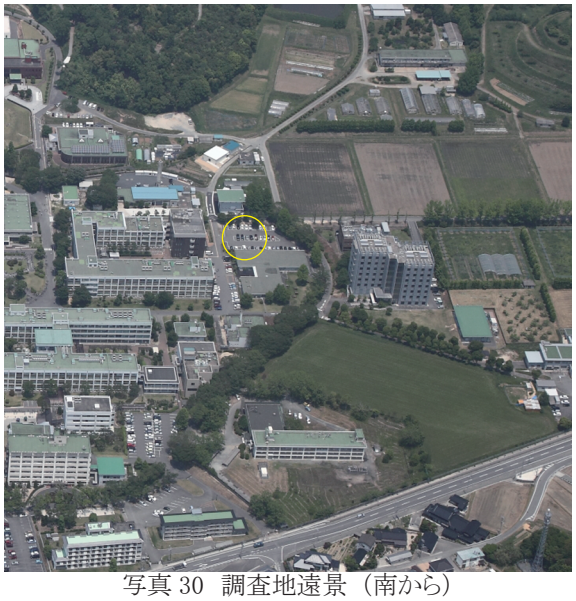

写真 30　調査地遠景（南から）


写真 31　調査前近景（西から）

【註】

1）河村吉行（1993）「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う試掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅠ』，山口

2）豆谷和之（1994）「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅡ』，山口

3）横山成己（2015）「特高受変電設備棟新営工事に伴う本発掘調査・立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成23年度－』，山口

（2）調査の経過（写真34・35）

調査は平成25年８月５日から10月７日にかけて実施した。８月５日に駐車場アスファルトの除去を行い、8月7日～12日に重機掘削、夏期休業（8月14日～18日）をはさみ8月19日～9月20日まで遺構検出および人力掘削、9月24日～10月1日にかけて写真撮影・実測等記録作業を行った。埋め戻しは10月2日～7日にかけて実施し、調査を終了した。

（3）基本層序（図6、写真40～45）

調査区内の基本層所は、全域において①アスファルト ②砕石・造成土 ③地山であった。特に調査区東部においてはアスファルト（厚5㎝）、砕石（厚10㎝）直下が地山であり、旧来の地形が大規模に削平されていることが判明した。造成土は調査区西部に厚く盛られており、西壁付近では0.9mの厚みを有している。当該地は本学吉田地区統合移転前、そして移転開始直後には正門から東門に抜ける農道が存在していたことが古写真から判明しているが、調査区西部においては自然堆積層上面にU字溝や軽量ブロックによる焼却炉が検出されていることから、統合移転時・移転直後に削平を行い、何らかの施設を設けていたことが判明した。

検出された地山は砂礫層、シルト層に大別されるが、開発予定地全域は元来丘陵末端であり、丘陵部からの流出土が谷地を徐々に埋めていったものと推測される。地山上面検出後に壁面に沿って断ち割りを行い、堆積層序とともに各層における埋蔵文化財の包含の有無を確認した。その結果、広域に及び確認された黄褐色～赤褐色系のシルト層には土器等の遺物が含まれないと判断されるに至ったため、この層を基盤層とし、遺構の検出を行うこととなった。

（4）遺構（図5・7・8、写真32・33・36～39）

自然河川（NR1）

調査の結果、調査区北西部において明黄褐色シルト層を切り込む北東－南西に走る自然河川(NR1)の左岸部を検出した。検出長11.2m、幅は最大で7.4m、深さは最深部で0.65mを測る。埋土は締まりが強く、シルト層と砂礫層の複雑な堆積となっている。

河川埋土からは縄文時代のものと見られる土器片が出土している。何れも小片であり、摩耗も著しく詳細な所属時期を特定することはできないものも多いが、多くは晩期のものと思われる。包含量に関しては、上位の灰白色シルト・砂礫砂礫～明黄褐色砂礫層にやや多く、下位に至るほど減少するが、総じてその量は希薄であった。遺物の取り上げについては、土層観察用北東－南西アゼ（図7）で河川埋土7～11を1層、12～18を2層、19～28を3層として行った。なお、遺物の埋蔵が希薄であること、後述する性格不明土壙状遺構が河川埋土を掘り込んでいることから、掘削は半裁に留め調査を終了した。

性格不明土壙状遺構（SX1）

調査区北西端部において、河川埋土上面から掘り込まれた土壙状遺構1基(SX1)を検出した。平面形態は長径約1.6m×短径約1.2mの楕円形であり、深さは0.35mを測る。底面はほぼフラットで、平面形態は直径約1mの円形を呈す。埋土断面の観察からは、柱根跡や明確な柱の抜き取り痕跡は見られず、遺構の性格は不明である。

埋土からは、縄文土器片、弥生土器片、土師器片のほか、古代の須恵器坏口縁部片が出土している。中世以降の明確な遺物が見られないことから、遺構の所属時期は古代である可能性が高い。

当調査では、上記の以外に遺構は確認されなかった。当地に対しては、大学造成時に大規模な削平

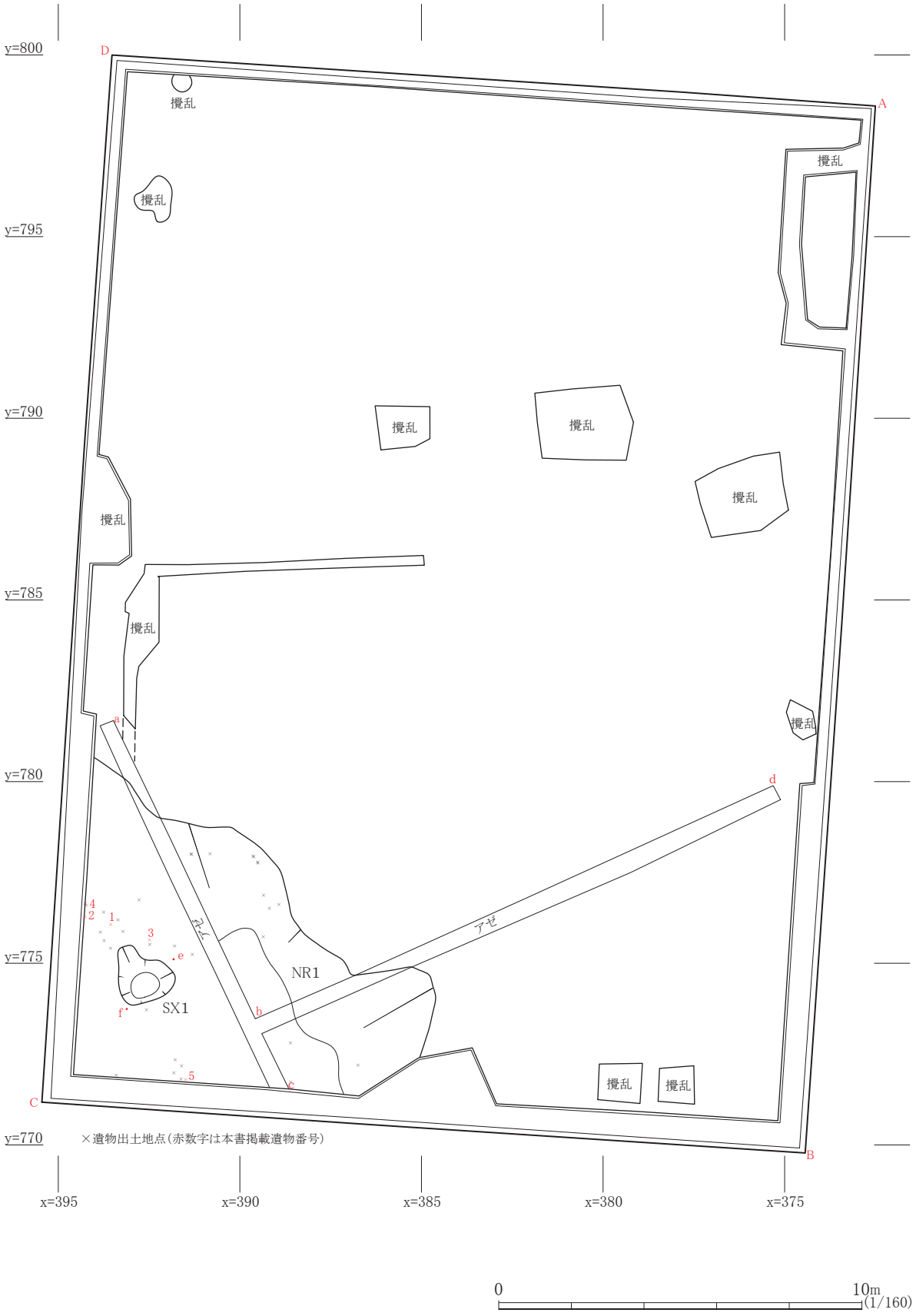
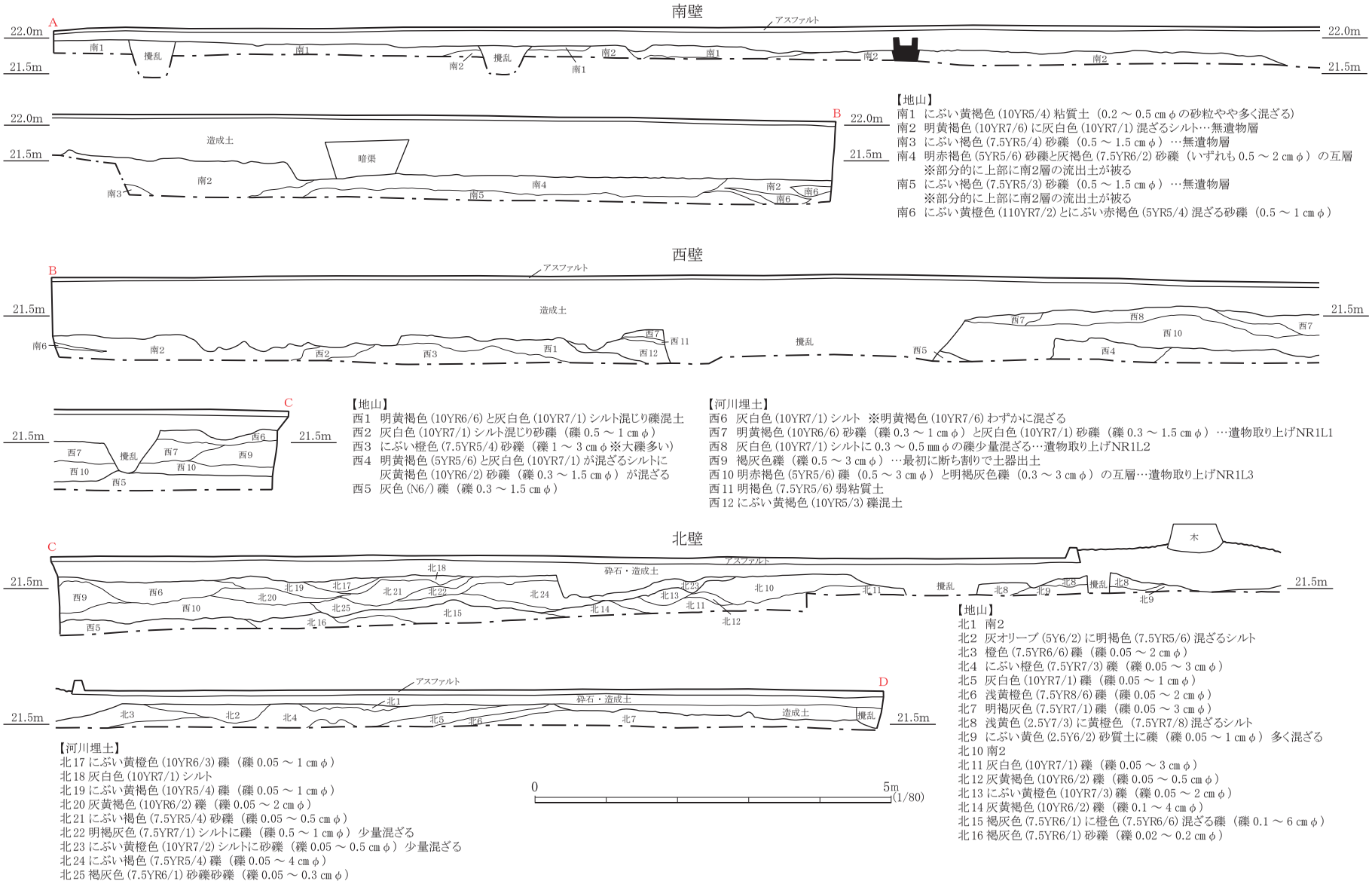

y=800
y=795
y=790
y=785
y=780
y=775
y=770
x=395
x=390
x=385
x=380
x=375
A
B
C
D
攪乱
NR1
SX1
アゼ
a
b
c
d
e
f
1
2
3
4
5
×遺物出土地点（赤数字は本書掲載遺物番号）
0
10m
(1/160)

図5　調査区平面図



【地山】
南1　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（0.2 ～ 0.5 cmφの砂粒ややや多く混ざる）
南2　明黄褐色（10YR7/6）に灰白色（10YR7/1）混ざるシルト…無遺物層
南3　にぶい褐色（7.5YR5/4）砂礫（0.5 ～ 1.5 cmφ）…無遺物層
南4　明赤褐色（5YR5/6）砂礫と灰褐色（7.5YR6/2）砂礫（いずれも 0.5 ～ 2 cmφ）の互層
※部分的に上部に南2層の流出土が被る
南5　にぶい褐色（7.5YR5/3）砂礫（0.5 ～ 1.5 cmφ）…無遺物層
※部分的に上部に南2層の流出土が被る
南6　にぶい黄橙色（110YR7/2）とにぶい赤褐色（5YR5/4）混ざる砂礫（0.5 ～ 1 cmφ）

【地山】
西1　明黄褐色（10YR6/6）と灰白色（10YR7/1）シルト混じり礫混土
西2　灰白色（10YR7/1）シルト混じり砂礫（礫 0.5 ～ 1 cmφ）
西3　にぶい橙色（7.5YR5/4）砂礫（礫 1 ～ 3 cmφ※大礫多い）
西4　明黄褐色（5YR5/6）と灰白色（10YR7/1）が混ざるシルトに
灰黄褐色（10YR6/2）砂礫（礫 0.3 ～ 1.5 cmφ）が混ざる
西5　灰色（N6/）礫（礫 0.3 ～ 1.5 cmφ）

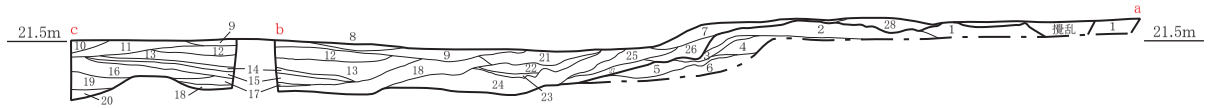
【河川埋土】
西6　灰白色（10YR7/1）シルト　※明黄褐色（10YR7/6）わずかに混ざる
西7　明黄褐色（10YR6/6）砂礫（礫 0.3 ～ 1 cmφ）と灰白色（10YR7/1）砂礫（礫 0.3 ～ 1.5 cmφ）…遺物取り上げNR1L1
西8　灰白色（10YR7/1）シルトに 0.3 ～ 0.5 mmφの礫少量混ざる…遺物取り上げNR1L2
西9　褐灰色礫（礫 0.5 ～ 3 cmφ）…最初に断ち割りで土器出土
西10 明赤褐色（5YR5/6）礫（0.5 ～ 3 cmφ）と明褐灰色礫（0.3 ～ 3 cmφ）の互層…遺物取り上げNR1L3
西11 明褐色（7.5YR5/6）弱粘質土
西12 にぶい黄褐色（10YR5/3）礫混土

【河川埋土】
北17 にぶい黄橙色（10YR6/3）礫（礫 0.05 ～ 1 cmφ）
北18 灰白色（10YR7/1）シルト
北19 にぶい黄褐色（10YR5/4）礫（礫 0.05 ～ 1 cmφ）
北20 灰黄褐色（10YR6/2）礫（礫 0.05 ～ 2 cmφ）
北21 にぶい褐色（7.5YR5/4）砂礫（礫 0.05 ～ 0.5 cmφ）
北22 明褐灰色（7.5YR7/1）シルトに礫（礫 0.5 ～ 1 cmφ）少量混ざる
北23 にぶい黄橙色（10YR7/2）シルトに砂礫（礫 0.05 ～ 0.5 cmφ）少量混ざる
北24 にぶい褐色（7.5YR5/4）礫（礫 0.05 ～ 4 cmφ）
北25 褐灰色（7.5YR6/1）砂礫砂礫（礫 0.05 ～ 0.3 cmφ）

【地山】
北1　南2
北2　灰オリーブ（5Y6/2）に明褐色（7.5YR5/6）混ざるシルト
北3　橙色（7.5YR6/6）礫（礫 0.05 ～ 2 cmφ）
北4　にぶい橙色（7.5YR7/3）礫（礫 0.05 ～ 3 cmφ）
北5　灰白色（10YR7/1）礫（礫 0.05 ～ 1 cmφ）
北6　浅黄橙色（7.5YR8/6）礫（礫 0.05 ～ 2 cmφ）
北7　明褐灰色（7.5YR7/1）礫（礫 0.05 ～ 3 cmφ）
北8　浅黄色（2.5Y7/3）に黄橙色（7.5YR7/8）混ざるシルト
北9　にぶい黄色（2.5Y6/2）砂質土に礫（礫 0.05 ～ 1 cmφ）多く混ざる
北10 南2
北11 灰白色（10YR7/1）礫（礫 0.05 ～ 3 cmφ）
北12 灰黄褐色（10YR6/2）礫（礫 0.05 ～ 0.5 cmφ）
北13 にぶい黄橙色（10YR7/3）礫（礫 0.05 ～ 2 cmφ）
北14 灰黄褐色（10YR6/2）礫（礫 0.1 ～ 4 cmφ）
北15 褐灰色（7.5YR6/1）に橙色（7.5YR6/6）混ざる礫（礫 0.1 ～ 6 cmφ）
北16 褐灰色（7.5YR6/1）砂礫（礫 0.02 ～ 0.2 cmφ）

図6　調査区南・西・北壁土層断面図

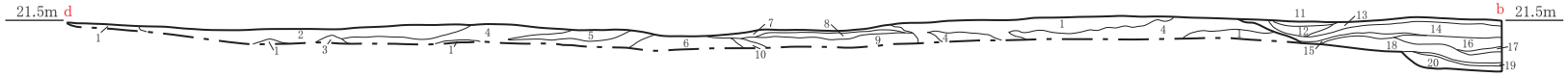
北東－南西アゼ



【河川埋土】
7　灰白色（5Y7/2）シルト
8　にぶい黄橙色（10YR7/3）礫（礫 0.05 ～ 3 cm φ）
9　橙色（7.5Y6/6）礫（礫 0.05 ～ 3 cm φ）
10 西壁7
11 灰白色（10YR7/1）礫（礫 0.05 ～ 2 cm φ）
12 灰黄褐色（10YR6/2）礫（礫 0.05 ～ 2 cm φ）
13 にぶい黄橙色（10YR6/3）礫（礫 0.05 ～ 1.5 cm φ）
14 明赤褐色（5YR5/6）礫（礫 0.3 ～ 2.5 cm φ）
15 明褐灰色（7.5YR7/1）礫（礫 0.1 ～ 4 cm φ）
16 明褐色（7.5YR5/6）礫（礫 0.1 ～ 1.5 cm φ）
17 褐灰色（10YR6/1）礫（礫 0.05 ～ 5 cm φ）
18 にぶい黄橙色（10YR7/2）礫（礫 0.02 ～ 1 cm φ）
19 明褐灰色（5YR7/1）礫（礫 0.2 ～ 2 cm φ）
20 灰オリーブ色（5Y6/2）砂礫（礫 0.05 ～ 0.3 cm φ）
21 灰白色（5Y7/1）シルト
22 にぶい黄橙色（10YR6/3）礫（礫 0.05 ～ 1 cm φ）
23 灰白色（5Y7/1）砂礫（礫 0.02 ～ 0.1 cm φ）
24 灰オリーブ色（5Y6/2）シルト
25 灰黄色（2.5Y7/2）礫（礫 0.02 ～ 1 cm φ）
26 灰白色（10Y7/1）シルト
27 灰色（N7/）シルト
28 北 23

【地山】
1　南2
2　にぶい黄褐色（10YR6/4）礫（礫 0.05 ～ 3 cm φ）
3　にぶい黄褐色（10YR7/2）砂礫（礫 0.05 ～ 0.2 cm φ）
4　橙色（7.5YR6/6）礫（礫 0.05 ～ 1.5 cm φ）
5　灰白色（10YR7/1）砂礫（礫 0.05 ～ 0.5 cm φ）
6　灰白色（2.5Y7/1）礫（礫 0.05 ～ 5 cm φ）

南東－北西アゼ



【地山】
1　南 2
2　南 6
3　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂
4　浅黄色（2.5Y7/4）砂礫（礫 0.1 ～ 1 cm φ）
5　にぶい黄橙色（10YR7/2）砂
6　橙色（7.5YR6/6）礫（礫 0.05 ～ 2 cm φ）
7　灰白色（2.5Y8/1）シルト
8　明黄褐色（10YR7/6）礫（礫 0.2 ～ 2.5 cm φ）
9　にぶい黄橙色（10YR7/2）礫（礫 0.02 ～ 3 cm φ）
10 灰白色（10YR7/1）砂礫（礫 0.02 ～ 0.5 cm φ）

【河川埋土】
11 灰白色（5Y8/1）シルト
12 浅黄色（2.5Y7/3）砂礫（礫 0.02 ～ 0.5 cm φ）
13 北東－南西アゼ 8
14 北東－南西アゼ 11
15 灰黄色（2.5YR7/2）シルト
16 北東－南西アゼ 12
17 北東－南西アゼ 13
18 北東－南西アゼ 14
19 北東－南西アゼ 16
20 北東－南西アゼ 17

0　5m
(1/80)

図7　NR1アゼ土層断面図

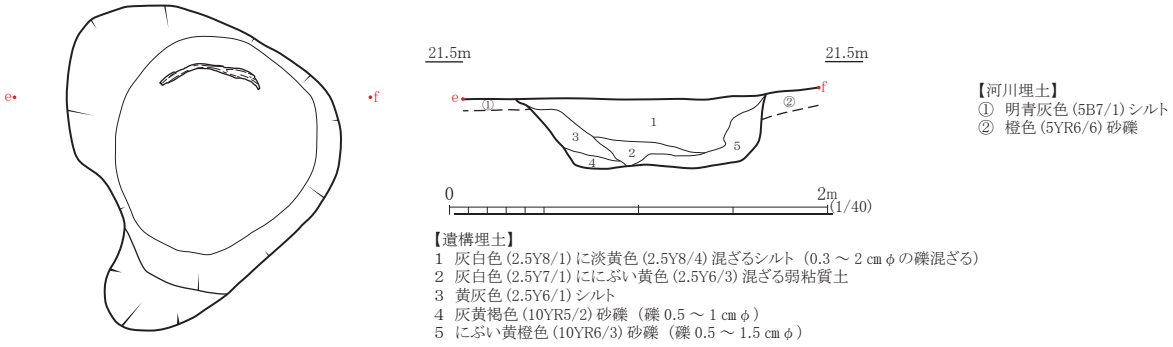


図8　SX1平面図・断面図

が行われたと推定されることから、これらの自然河川や遺構は、元来はより高位から掘り込まれていたものと考えられる。

（5）遺物（図9、表4、写真48･49）

図化可能な遺物は、いずれも土器である。

1～5は自然河川（NR1）出土の縄文土器で、1～4が第2層、5が第3層からの出土である。連合獣医学研究棟新営に伴う発掘調査にて検出された自然河川からは、多数の縄文土器が出土している[註1]。わずかに縄文時代前･中期の土器も見られるものの、大多数は縄文時代晩期に所属する土器であった。実測不能であった小片を含め、本調査にて出土した土器は器面が摩滅しており、遺存状態が不良なものばかりであったものの、やはり縄文時代晩期の深鉢･浅鉢形土器と見られる。**1**は器壁の薄い上げ底状の底部で、立ち上がりが緩やかなことから浅鉢型土器底部の可能性がある。**2**は大きく外反する深鉢の口縁部片。端部は鈍く面を取る。内外面に条痕が見られる。**3**は直立する深鉢口縁部片で、外面に条痕が残る。内面はナデ。**4**は胴部片。内面は風化により観察不能。外面は横方向の条痕が残る。**5**は深鉢の口縁部片か。やや外方につまみ出した擬口縁部で折損したと見られ、元来は屈曲しつつ上方に伸びる口縁が付くものと思われる。内外面ともに風化により調整不明。

6･7は自然河川埋土を掘り込むSX1から出土した。**6**は弥生土器壺の肩部片と見られる。外面に3条の沈線が残る。外面ナデ、内面は風化により観察不能。**7**は須恵器坏。口縁部の小片であり、口径は復元不能である。内外面とも回転ナデ調整が施される。SX1埋土からの出土遺物はいずれも細片であり、縄文土器と見られる破片も存在するが、中世以降に下る明確な遺物が存在しないことから、遺構の所属時期は古代と推定される。

8は調査区東壁沿いの側溝にて攪乱埋土より出土した須恵器坏口縁部片。内外面とも回転ナデ調整が施され、復元口径は14.8㎝を測る。**9**も攪乱埋土からの出土で、須恵器高台付坏の底部片である。幅広で短い高台が底部外端のやや内側に付く。高台の内端はわずかに肥厚する。

10は重機掘削時に造成土より出土した土師質土器大甕の口縁部片。外面は剥離しているものの、器壁は約2.5㎝と分厚い。口縁内端をわずかに肥厚させており、内面は横方向のハケ調整後ナデ調整が施されている。

【註】

1）豆谷和之（1994）「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』，山口



写真 32　遺構面検出状況（西から）



写真 33　完掘状況（西から）



写真 34　重機掘削風景（南東から）



写真 35　作業風景（北東から）



写真 36　遺構面検出状況（南東から）



写真 37　NR1遺物出土状況（南西から）



写真 38　NR1遺物出土状況（西から）

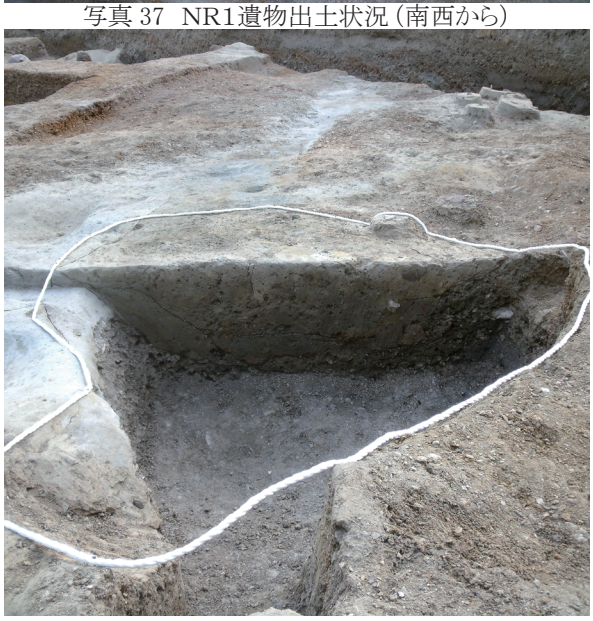


写真 39　SX1半裁状況（北西から）



写真40　調査区南壁東側土層断面（北東から）



写真41　調査区南壁西側土層断面（北東から）



写真42　調査区西壁南側土層断面（南東から）



写真43　調査区西壁北側土層断面（南東から）



写真44　調査区北壁西側土層断面（南西から）



写真45　調査区北壁東側土層断面（南西から）



写真46　NR1北東-南西アゼ南東面土層断面（南東から）



写真47　NR1南東-北西アゼ北東面土層断面（北東から）

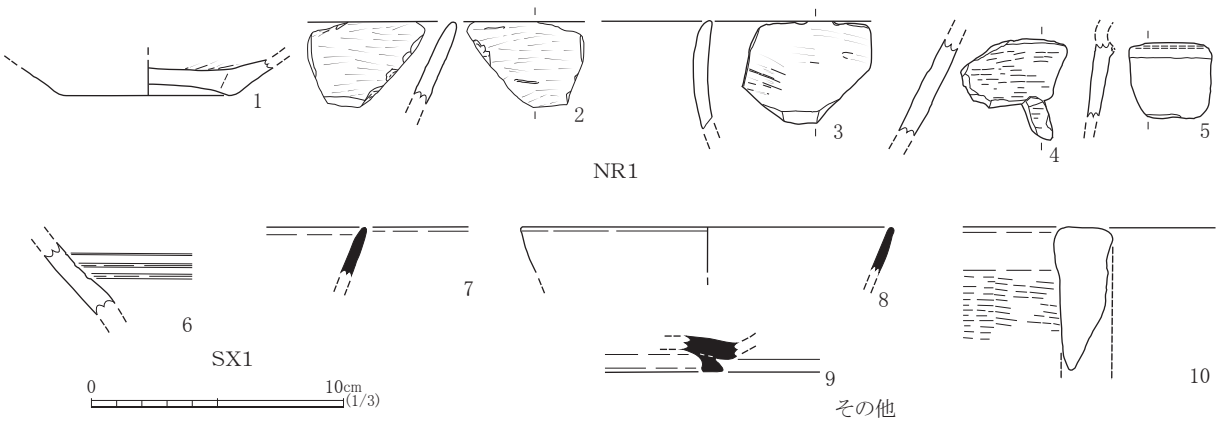


図9 出土土器実測図

表4 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	NR1 2層	縄文土器 鉢	底部	②6.6③1.4	①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰白色(2.5Y8/2)	やや粗:0.5～1mmの石英・長石をやや多く含む	
2	NR1 2層	縄文土器 深鉢	口縁部	③3.3	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや粗:0.5～1mmの石英・長石を多量に含む	
3	NR1 2層	縄文土器 深鉢	口縁部	③4.2	①灰黄褐色(10YR5/2)・にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	やや粗:0.5～2mmの石英・長石を多量に含む	
4	NR1 2層	縄文土器 深鉢	胴部	③3.8	①黒色(7.5YR2/1) ②黒褐色(7.5YR3/1)	やや粗:0.5～2mmの石英・長石をやや多く含む	
5	NR1 3層	縄文土器 深鉢	口縁部	③3.0	①にぶい黄褐色(10YR5/4) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	やや粗:0.5～1mmの石英・長石をやや多く含む	
6	SX1	弥生土器 壺か	肩部	③3.1	①黒褐色(10YR3/1) ②灰黄色(2.5Y7/2)	やや粗:0.5mmの石英・長石を少量含む	
7	SX1	須恵器 坏	口縁部	③2.0	①灰白色(5Y7/1) ②灰白色(5Y7/1)	やや粗:0.5～1㎜の石英・長石を少量含む	
8	調査区東壁側溝	須恵器 坏	口縁部	①(14.8)③1.8	①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰色(N6/)	密:0.5mmの石英・長石をやや多く含む	
9	攪乱埋土	須恵器 高台付坏	底部	③1.4	①灰白色(N7/) ②灰色(N6/)	密:0.5mmの石英・長石を少量含む	
10	造成土中	土師質土器 甕	口縁部	③5.7	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②灰褐色(7.5YR6/2)	密:0.5～1.5mmの石英・長石を少量含む	

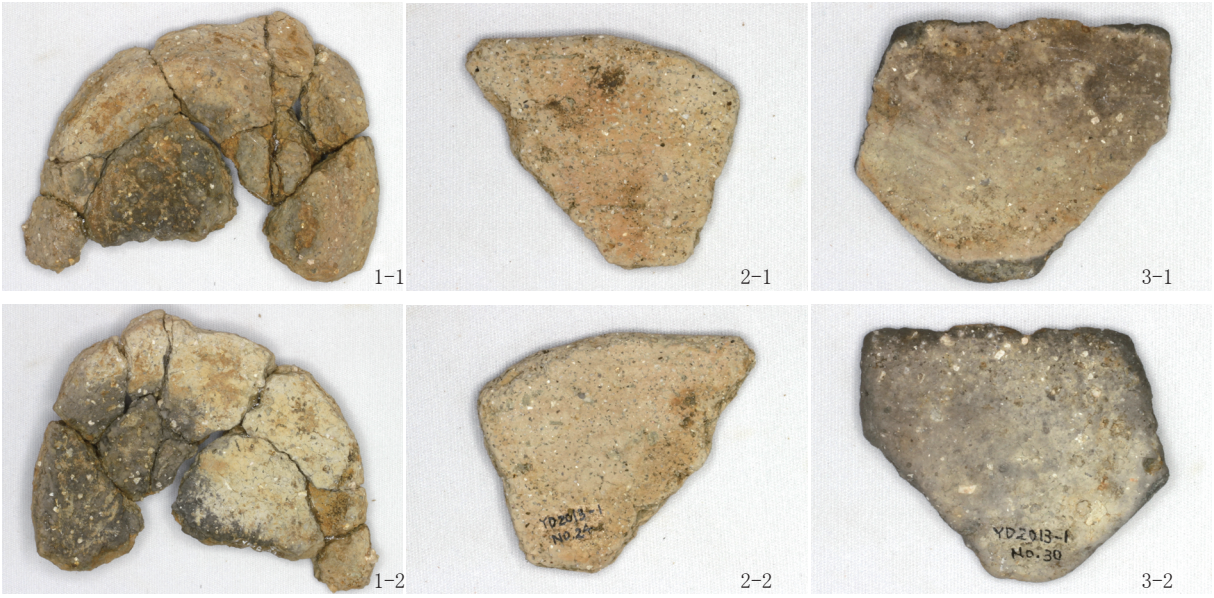
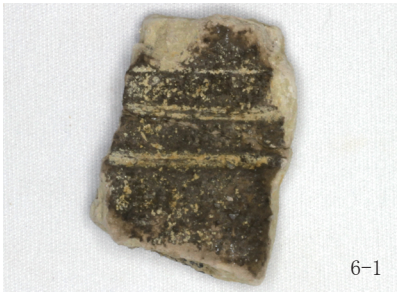


写真 48 出土遺物 (土器)①


4-1


5-1


6-1


4-2


5-2


6-2


7-1


8-1


9-1



7-2



8-2


9-2


10-1


10-2

写真 49　出土遺物（土器)②

（6）小結（図10）

獣医学国際教育研究センターは、平成3・4年度に調査を実施し、縄文時代の埋没河川を検出した農学部連合獣医学科棟敷地の東に隣接して計画されたことから、予備発掘調査を経ずして予定地全域を対象に本発掘調査を実施することとなった。

当地は、既往の調査により古代官衙関連遺構が密に確認されている、構内南東部の南東から北西に伸びる丘陵（吉田構内動物医療センター、共同獣医学部解剖実習棟、総合病性鑑定研究施設、総合研究棟敷地）の末端部に当たると推定され、その地形は本学吉田地区統合移転前の航空写真に棚田としてわずかに認めることができるが、統合移転最初期の現理学部3号館建設の際に大きく削平を受けたようで、遺構が遺存するのは旧地形での低地となる調査区北東端部のみであった。検出された遺構としては、自然河川1条（NR1）と性格不明の土壙状遺構1基（SX1）がある。

自然河川跡は、河底の高低差から北東－南西に走るようであり、希薄ながらも縄文時代晩期土器を埋土に包含することから、農学部連合獣医学科棟敷地にて確認された河川と同一のものと考えられ、河川幅は20～30mに復元される。当河川は、農学部連合獣医学科棟調査区内で西南に屈曲することから、昭和62年度に実施した現メディア基盤センター棟敷地の調査にて検出された縄文時代河川跡[註1]と同一のものである可能性が高いと推定されたが[註2]、以降両地点間において河川跡を確認できていない。既往の調査により、吉田構内においては、東や南の山間部を起源とする複数の谷筋や流路が複雑に入り混じっていることが判明しつつあるが、両河川に関する同一性の判断は保留すべきと考える。なお、今回検出した河川埋土中には、弥生土器の可能性がある小片も含まれることから、河川の機能時期については注意が必要である。

また当調査では、河川埋土に包含される縄文土器が極めて希薄であった。農学部連合獣医学科棟調査区で検出した河川では、土器の分布状況から右岸の岬状突出部を中心に水場としての使用が推定されている。縄文時代晩期の集落は、河川右岸の低地側に展開していた可能性が指摘されるが、これも将来の調査に期待したい。

河川埋土を掘り込んでいる土壙状遺構（SX1）は、長径約1.6m×短径約1.2mの楕円形であり、深さは0.35mを測る。明確な柱根腐蝕痕や柱抜き取り痕は観察されず、形状や規模、埋没河川上にあることなどから井戸の可能性も考慮されたが、明確な根拠を得るに至らなかった。出土遺物は土器の細片に限られるものの、古代に所属する須恵器が含まれていることから、所属時期の上限の一端ををうかがい知ることができる。

この他、平成23年度に調査区の北隣接地にて実施した特高受変電設備棟新営工事に伴う発掘調査では、出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代にかけて機能していたと推定される、南東から北西に走る自然河川が確認された[註3]。この河川は、調査区南東端部での河底が標高21.0mであったことから、当調査区においてその上流部が検出されるものと想定していたが、調査区北部域、標高21.5mの地山面でその痕跡を確認することができなかった。両調査区の隔たりは約12mであり、この距離での急激な河底の上昇は想定し難いことから、当河川は特高受変電設備棟敷地から東に屈曲して上流に至るものと思われる。

以上が当発掘調査のまとめである。確認された遺構は少数であったが、元来丘陵末端部であったこの地に遺構が希薄であったとは考え難い。本学吉田地区統合移転工事最初期である昭和41年（1966）には当地が削平されていることが諸記録から判明している。統合移転に際しては、昭和42年（1967）に山口大学吉田遺跡調査団を結成し、埋蔵文化財保護活動を開始したとの記録が残るものの、当館設立以前

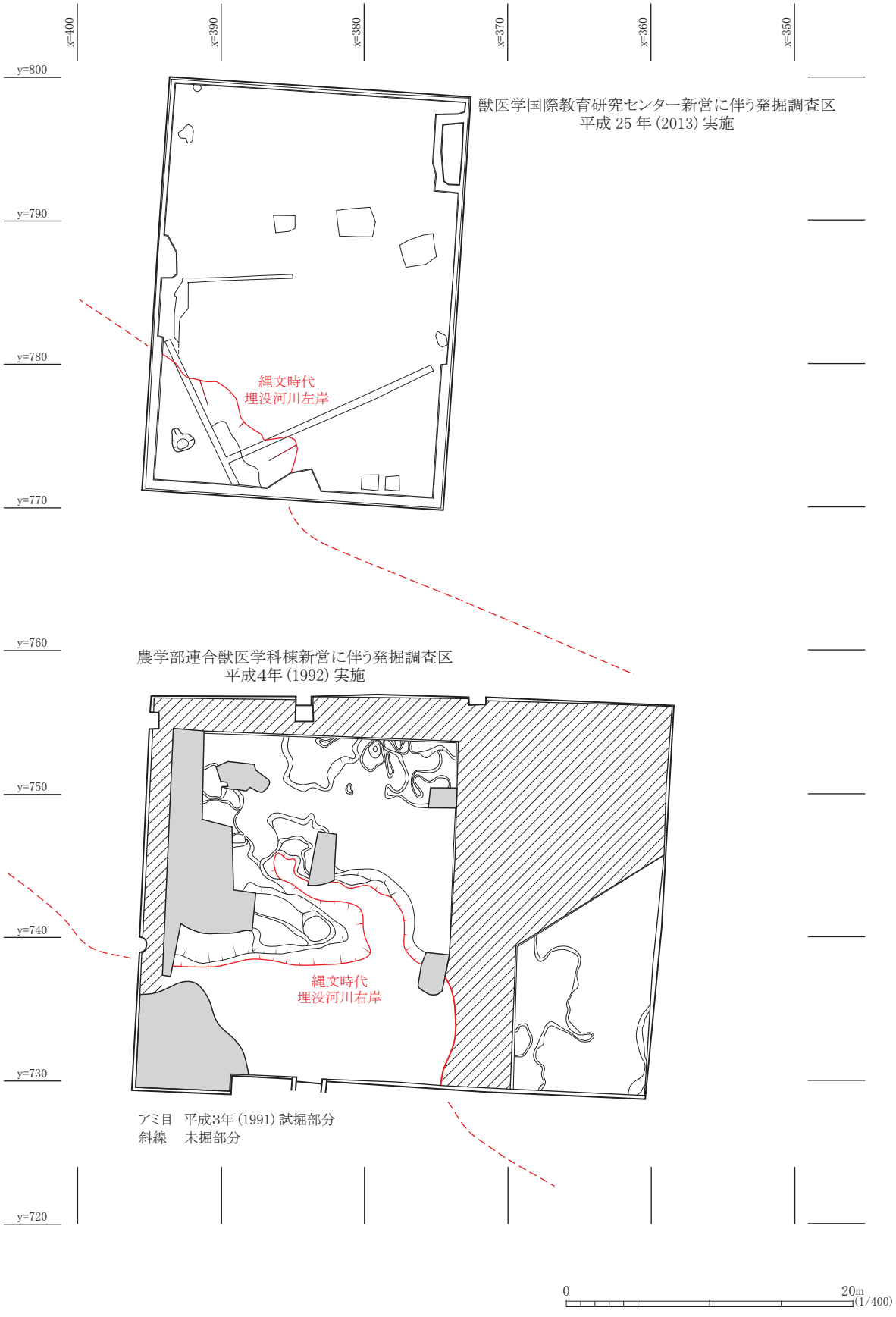


図 10　既往調査との位置関係

は学部校舎等大規模施設新営時に十分な埋蔵文化財保護措置を施していない。本学としては負の歴史と言えるが、今後人類の共有財産たる埋蔵文化財を護り続ける上での反省を含めて、当調査では重要な成果を得たと考えたい。

【註】

1)河村吉行(1988)「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』, 山口

2)豆谷和之(1994)「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』, 山口

3)横山成己(2015)「特高受変電設備棟新営に伴う本発掘調査・立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成23年度－』, 山口

2．第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査

調査地区　吉田構内F-16、G-16・17区

調査面積　692㎡

調査期間　平成25年10月10日～12月27日

調査担当　横山成己　川島尚宗　石丸恵利子

調査結果

（1）調査の経緯（図11、写真50・51）

吉田構内第1武道場耐震改修その他工事に伴い、陸上競技場北東側に位置する2棟の体育器具庫が解体され、新たに体育器具庫が建設されることとなった。既往の埋蔵文化財調査により、周辺地には弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が密に分布していることが確認されている。現在遺構が地下に埋め戻し保存されている「遺跡保存公園」においては、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡が21棟[註1]、現国際総合科学部棟新営工事に伴う発掘調査では、同じく弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居跡が4棟[註2]、さらにラグビー場防球ネット新営工事に伴う発掘調査では弥生時代終末期から古墳時代初頭の竪穴住居跡が1棟、弥生時代中期から後期にかけての大溝1条[註3]が検出されている。

また開発予定地の東に隣接する第2体育館新営に伴う発掘調査では、弥生時代の大溝3条が検出され[註4]、さらに既設の東南端の体育器具庫新営に伴う試掘調査では、調査区の北端と中央で時期不明の河川が2条確認されている[註5]ことから、当該地に何らかの埋蔵文化財が埋存することは確定的と考えられた。

当事業計画に関しては、平成24年度末の段階で工事内容が不明確であり、埋蔵文化財保護対応は当館館長の裁量に委ねられていたいたが、既設の2棟の体育器具庫は設置に際し事前の発掘調査を実施しておらず、新営される体育器具庫は地下のほぼ全域に巨大なピットが設けられる予定であったため、本発掘調査を実施し、埋蔵文化財の遺存状況を確認することが承認された。



図 11　調査区位置図



写真 50　調査地遠景（南から）



写真 51　調査前近景（北西から）

【註】

1)河村吉行(1988)「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』,山口

河村吉行(1990)「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和60・61年度)」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』,山口

河村吉行(1991)「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(総括)」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』,山口

2)河村吉行(1982)「教育学部構内H-19区の発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』,山口

3)磯部貴文・河村吉行(1985)「吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口

4)村田裕一・中村仁美(2000)「吉田構内第2屋内運動場新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅣ』,山口

5)豆谷和之(2000)「吉田体育器具庫及び便所新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅣ』,山口

(2)調査の経過(写真52)

調査は獣医学国際教育研究センター棟の新営に伴う本発掘調査終了直後の10月10日より着手した。10月15日に重機掘削を終え、10月31日に遺構面を検出したところ、調査区長軸に直交して幅約30mの黒褐色土が存在することが確認されたため、解体した体育器具庫の布掘り基礎部を利用してトレンチ調査を実施し、土層断面により黒褐色土の性格および深度を確認することとなった。その結果、幅約30mにわたり複数の河川と溝が並列して存在し、深いものでは深度が1.2mに及ぶことが確認された。

11月13日までに遺構を覆う遺物包含層を除去し、遺構検出を行った後、遺構掘削を進めた。当初の調査計画は11月半ばが終了予定であったが、人力掘削の土量が予想を遥かに超え、またトレンチ調査時に溝底面に杭列等を確認し、木製品の良好な遺存が想定されたことなどから、関係部局との調整により、12月後半まで調査を延長することとなった。

遺構掘削は12月19日をもって終了し、12月20日までに木製品の取り上げを終え、12月24日に完掘写真を撮影、12月25日から27日にかけて各種記録作業を実施し、調査を終了した。

(3)基本層序(図12、写真88～95)

調査区における基本層序は、中部から北西部にかけては①表土・真砂(5～15㎝)、②旧耕土(5～14㎝)、③旧床土(2～18㎝)、④地山であるが、北西端部は棚田状に落ち込んでおり、表土下に造成土が置かれている。調査区南東部は①表土(10～15㎝)、②遺構基盤層となっている。表土下の遺構基盤層は風化岩盤層であり、大きく削平を受けていることが分かる。なお、中北部の遺構基盤層である、明黄色・オリーブ色等のシルト層や砂礫層は、いわゆる地山ではなく、縄文時代の土器を包含している。

(4)遺構(図12、写真53～55)

大きく削平を受けている調査区南東部には遺構は遺存していない。検出した遺構は全て調査区中～北西部にかけてであり、自然河川1条(NR1)、溝6条(SD1a・b、SD2a・b、SD3、SD4)、溝底部の性



写真 52　遺物包含層上面検出状況（南から）



写真 53　遺構検出状況（南東から）



写真 54　SD1・2検出状況（南西から）

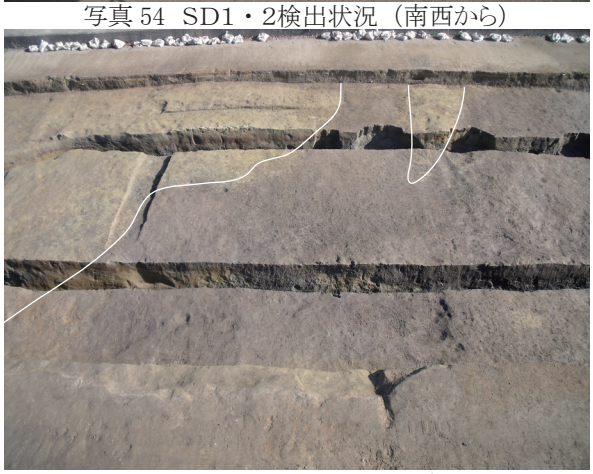


写真 55　NR1・SD4検出状況（南西から）

格不明土壙状遺構4基（SX1～4）、土壙3基（SK1～3）を数える。

遺構の先後関係に関する概要を先に述べる。SD3はNR1左岸からの導水のための溝であり、両者が同時期に存在したことが分かる。SD2a・bはNR1の南東に隣接する。平面的に2条の溝に見えるが、埋土の観察では同時期に機能しており、大溝の両縁部を深く掘りくぼめたものと解釈できる。SD3との関係については、重複部が近代の水田床土により破壊されているため（図11の西壁7層）、切り合いを確認することができなかった。水田床土がこの部分だけ深く掘り下げられ、暗渠が設けられているのは、SD2a・bおよびSX3、SD3が地下に存在することに起因すると思われる。SD1a・bはSD2a・b南東に隣接し、一部重複する。既設の排水枡とヒューム管、水道管に大きく破壊されているが、SD2aを切り込んで形成されている。SD1aはSD1bの掘り直しである。SD4はNR1の北に隣接し、一部重複する。NR1が埋没した跡の溝であるが、調査区西側では明確な掘り込みが見られない。

溝内部の性格不明土壙状遺構4基は、SX1がSD2a、SX2および3がSD2b、SX4がNR1とSD3の接続部に設けられている。

SK1は、NR1の右岸に接する土壙である。NR1の埋土最上層下に検出されたため、NR1完全埋没前のものである。SK2は、NR1の右岸近く、SD4の埋土下より検出されている。SK3はNR1埋土掘削時にプランを確認することができず、土層観察用アゼの断面観察時にその存在を確認したため、その規模は不明である。NR1がほぼ埋没した時点で掘り込まれた土壙であり、埋土上部にはNR1埋土最上層が堆積することから、SK1と同時期の可能性もある。以下に、各遺構の特徴を記するが、種別順ではなく遺構の位置（北西から南東）の順に報告する。

自然河川（NR1）（図13・14、写真56～65）

NR1は緩やかに北に湾曲しながら西流しており、調査区東側で幅約12.4m、西側で幅約6.6mを測る。深さは0.8～1.2mほどで、上流に当たる調査区東壁側で標高16.1m、下流側にあたる西壁側で16.0mを測る。

埋土は、下層（L5）が水流堆積である黒色砂礫または黒色の粘土層で、中層（L2～4）は黒褐色・オリーブ黒色の砂を含む粘質土、上層（L1）は暗オリーブ色の粘質土となっている（写真56～60）。中層下位から下層にかけては自然木や杭、矢板などが流れ込んでいるものの、その量は顕著でない（写真61～63）。

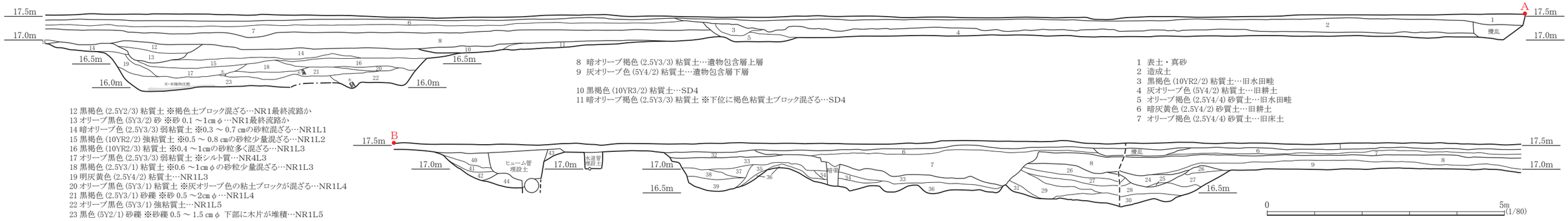
調査区西壁付近の右岸側河底部に、杭と矢板が密集して打たれている地点を確認した（図11「杭・矢板密集地点」、写真64・65）。矢板は水流方向に対して面を平行させているものが多いことが気にかかるが、調査区外であるため断定はできないものの、左岸に向かって伸びているようで、井堰の可能性が指摘される。その他の川底部にも数箇所に杭が打たれていることを確認したが、規則性は見られなかった。

埋土中の遺物は希薄で、下層には少数ながら弥生時代前期の土器が含まれることから、弥生時代前期以降に機能した河川であることが分かる。遺物の希薄さは、総合図書館3号館敷地にて確認された多量の遺物を包含する弥生時代以降の自然河川[註1]と対照的である。この相違は、集落との距離に関係すると思われるが、総合図書館の河川がゴミの廃棄場所として使用されているのに対し、当調査にて検出された河川は、弥生時代集落の農業用・日常生活用として活用され、人為的に管理されていた結果と推定される。埋土中～上層の遺物は、古墳時代前期が下限となっており、古墳時代前期をあまり下らない時期に完全埋没したと見なされる。

溝3（SD3）・性格不明土壙状遺構4（SX4）（図13・14・16、写真66～70・94・95）

SD3はNR1の左岸に接続し、南方向に走る溝であり、NR1との接続部底面に掘り込まれた楕円形の

西壁



1 表土・真砂
2 造成土
3 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土…旧水田畦
4 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土…旧耕土
5 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土…旧水田畦
6 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土…旧耕土
7 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土…旧床土

8 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土…遺物包含層上層
9 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土…遺物包含層下層

10 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土…SD4
11 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土 ※下位に褐色粘質土ブロック混ざる…SD4

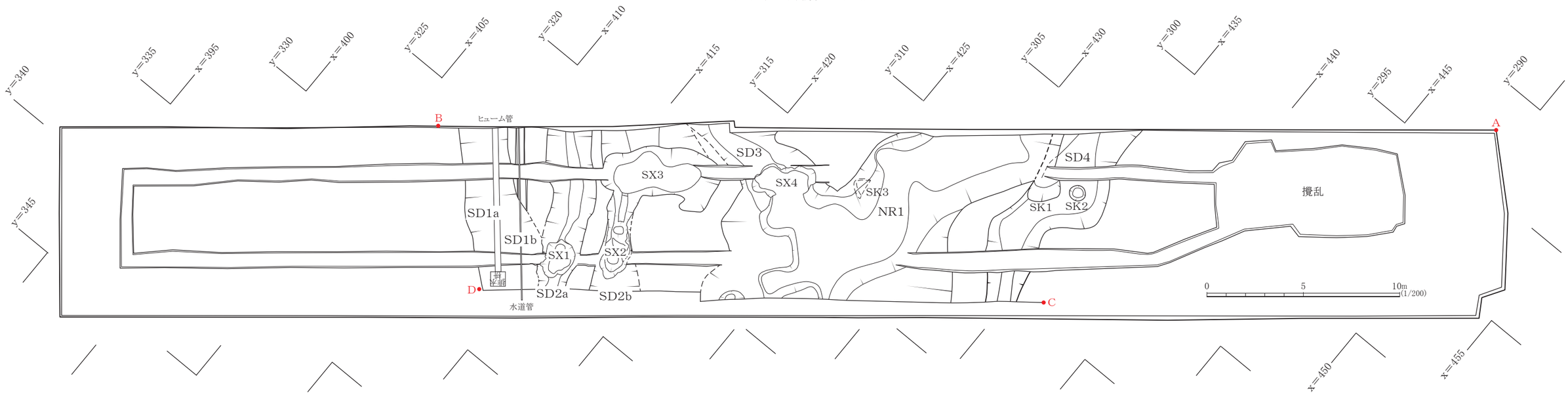
12 黒褐色 (2.5Y2/3) 粘質土 ※褐色土ブロック混ざる…NR1最終流路か
13 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂 ※砂 0.1 ～1㎝φ…NR1最終流路か
14 暗オリーブ色 (2.5Y3/3) 弱粘質土 ※0.3 ～ 0.7 ㎝の砂粒混ざる…NR1L1
15 黒褐色 (10YR2/2) 強粘質土 ※0.5 ～ 0.8 ㎝の砂粒少量混ざる…NR1L2
16 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 ※0.4 ～1㎝の砂粒多く混ざる…NR1L3
17 オリーブ黒色 (2.5Y3/3) 弱粘質土 ※シルト質…NR4L3
18 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土 ※0.6 ～1㎝φの砂粒少量混ざる…NR1L3
19 明灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土…NR1L3
20 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘質土 ※灰オリーブ色の粘土ブロックが混ざる…NR1L4
21 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂礫 ※砂 0.5 ～2㎝φ…NR1L4
22 オリーブ黒色 (5Y3/1) 強粘質土…NR1L5
23 黒色 (5Y2/1) 砂礫 ※砂礫 0.5 ～ 1.5 ㎝φ 下部に木片が堆積…NR1L5

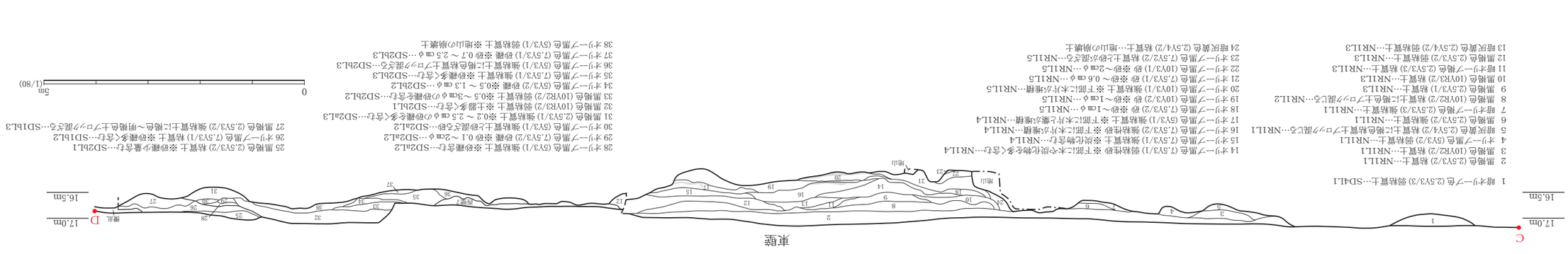
40 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 ※1～4㎝の褐色土ブロック混ざる…SD1aL1
41 オリーブ黒色 (5YR3/1) シルト…SD1aL2
42 オリーブ黒色 (5Y2/2) 砂質土…SD1aL3
43 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 弱粘質土…SD1bL1
44 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 ※1～ 1.5 ㎝φの赤褐色土ブロック混ざる…SD1bL3

32 黒褐色 (2.5Y3/2) 弱粘質土…包含層上層 (8) と同一層か

33 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂混じり粘質土 ※砂 0.3 ～ 0.5 ㎝φ…SD2L1
34 黒色 (10YR2/1) 粘質土…SD2L2
35 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土…SD2L2
36 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 ※0.3 ～1㎝φの砂多く混ざる…SD2L3
37 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土…SD2aL2
38 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土…SD2aL2
39 黒色 (10YR2/1) 粘質土…SD2aL3

24 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘質土…SD3最終流路か
25 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂 ※砂 0.1 ～ 0.5 ㎝φ…SD3最終流路か
26 暗オリーブ色 (2.5Y3/3) 弱粘質土 ※0.3 ～ 0.7 ㎝の砂粒混ざる…SD3L1
27 黒褐色 (10YR2/2) 強粘質土 ※0.5 ～ 0.8 ㎝の砂粒少量混ざる…SD3L2
28 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土 ※炭化物少量混ざる…SD3L3
29 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 強粘質土…SD3L4
30 オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂 ※砂 0.2 ～ 0.8 ㎝φ…SD3L4
31 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 ※赤褐色・褐色の粘質土ブロック混ざる…SD3L4





1 畔オリーブ色 (2.5Y3/3) 弱粘質土…SD4L1
2 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土…NR1L1
3 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土…NR1L1
4 オリーブ黒色 (5Y3/2) 弱粘質土…NR1L1
5 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土に褐色粘質土ブロック混じる…NR1L1
6 黒褐色 (2.5Y3/2) 強粘質土…NR1L1
7 畔オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 強粘質土…NR1L1
8 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土にオリーブ色土ブロック混じる…NR1L2
9 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土…NR1L3
10 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土…NR1L3
11 畔オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土…NR1L3
12 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土…NR1L3
13 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 弱粘質土…NR1L3
14 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 弱粘性砂 ※下部に木や炭化物を多く含む…NR1L4
15 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 強粘性砂 ※炭化物含む…NR1L4
16 オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 強粘性砂 ※下部に木片が堆積…NR1L4
17 オリーブ黒色 (5Y3/1) 強粘質土 ※下部に木片と葉が堆積…NR1L4
18 オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 砂 ※砂～1㎝φ…NR1L5
19 オリーブ黒色 (10Y3/2) 砂 ※砂～1㎝φ…NR1L5
20 オリーブ黒色 (10Y3/1) 強粘質土 ※下部に木片が堆積…NR1L5
21 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 砂 ※砂～ 0.6 ㎝φ…NR1L5
22 オリーブ黒色 (10Y3/1) 砂 ※砂～2㎝φ…NR1L5
23 オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 粘質土砂混じる…NR1L5
24 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土…地山の崩壊土

25 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 ※砂礫少量含む…SD2bL1
26 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘質土 ※砂礫多く含む…SD1bL2
27 黒褐色 (2.5Y3/2) 強粘質土に褐色～明褐色ブロック混ざる…SD1bL3
28 オリーブ黒色 (6Y3/1) 強粘質土 ※砂礫含む…SD2aL2
29 オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 砂礫 ※砂 0.1 ～2㎝φ…SD2aL2
30 オリーブ黒色 (5Y3/1) 強粘質土砂混じる砂…SD2aL2
31 黒褐色 (2.5Y3/1) 強粘質土 ※0.2 ～ 2.5 ㎝φの砂礫を多く含む…SD2aL3
32 黒褐色 (10YR2/2) 弱粘質土 ※土器多く含む…SD2bL1
33 黒褐色 (10YR2/2) 弱粘質土 ※0.5 ～3㎝φの砂礫を含む…SD2bL2
34 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂礫 ※0.5 ～ 1.3 ㎝φ…SD2bL2
35 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 強粘質土 ※砂礫多く含む…SD2bL3
36 オリーブ黒色 (5Y3/1) 強粘質土に褐色粘質土ブロック混ざる…SD2bL3
37 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 砂礫 ※砂 0.7 ～ 2.5 ㎝φ…SD2bL3
38 オリーブ黒色 (5Y3/1) 弱粘質土 ※地山の崩壊土

図 12 調査区平面図／断面図

土壙状遺構がSX4である。

SD3は近代の上部からの掘り込みにより左肩部を破壊されているが、幅約3.5m、深さ約0.7mを測る。調査区西壁での溝底の標高は16.2mで、NR1から緩やかに降下している。土層断面観察により、NR1の下層（L5）はSD3に流れ込んでおらず、中層以上が同一層として堆積していることが分かる（図14中）。なお、検出範囲は短区間であるものの、NR1河底に見られる自然木などはSD3に流入していない。埋土中の土器も希薄で、わずかに多重沈線が施された弥生土器甕胴部片と、蓋裾部片が見られるのみである。

SX4は南東－北西方向の楕円形の土壙状遺構で、SD3の走方向に対し長軸がほぼ直交する。規模は長さ3.35m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。底面には円形に杭が打ち込まれており、南東側に枝葉やイネ科の茎と見られる植物遺存体が層状に堆積している（写真68）。埋土はオリーブ黒色砂礫または粘質土で、NR1下層とほぼ同一である。埋土中に遺物は含まれていなかった。

溝4（SD4）（図12、写真61）

前述したが、SD4はNR1が完全埋没した後の溝である。東から西に走っており、上流となる調査区東壁側で幅1.6mを測るが、西に至るほど幅が広まり、肩部も不明確になる。調査区西壁側で幅約4mを測る。深さは最深部で0.25mを測る。

埋土中の遺物は希薄で、実測可能な土器は弥生土器甕口縁部のみである。NR1の埋没時期から流入と見られ、遺構の所属時期に関しては、上限を古墳時代前期以降と記するにとどめる。

土壙1（SK1）（図13・15、写真69）

SK1は、NR1右岸に位置する土壙で、SD4埋土およびNR1上層の下位に検出された。南西半部を既設体育器具庫基礎に破壊されているため、全体の形状は不明であるものの、基礎掘りの対面断面には及んでいないことから、平面形は隅丸三角形状であったと推測される。残存最大幅は1.85m、底面までの深さは約0.6mで、底面ほぼ中央に径0.2m、深さ0.17mの掘り込みが設けられている。埋土は黒色またはオリーブ色系統の粘質土で、ブロックが多く混ざる。遺構の性格に関しては、河川横でもあることから小動物捕獲用の落とし穴などが考えられるが、確証はない。埋土中に遺物は含まれていないことから、所属時期についても弥生時代以降で古墳時代前期以前と記するにとどめる。

土壙2（SK2）（図13・15、写真70）

SK2はSK1の北西約0.5mに隣接し、SD4埋土下に検出された。平面形は長軸0.85m×短軸0.8mの正円に近い楕円形で、深さは0.6mを測る。底面は平坦で、径0.6mの円形を呈す。検出時に、土壙中央部に径0.4mの柱根状痕跡（浅い黄色砂質土）を確認していたが、遺構底面まで続かないことが判明した。埋土は均質な黒褐色粘質土であり、遺物は確認されなかった。SD4は古墳時代前期以降のものであるが時期不明であるため、当遺構の時期も特定できない。

土壙3（SK3）（図13・14）

前述のように、SK3はNR1埋土掘削時にプランが確認できず破壊し、土層観察用のアゼによりその存在を確認した遺構である。遺構はNR1埋土上層（L1）下位の中層（L2）から掘り込まれており、残存規模は長さ1m、深さ0.55mを測る（図14中・下）。埋土は暗褐色～黒色の粘質土で、底面に枝葉層が認められた。NR1完全埋没直前の遺構であり、層位的に古墳時代前期に所属時期を求められるが、NR1埋土と分離しての遺構掘削は、土層観察用アゼ部分でしか行えておらず、遺物を確認することはできなかった。

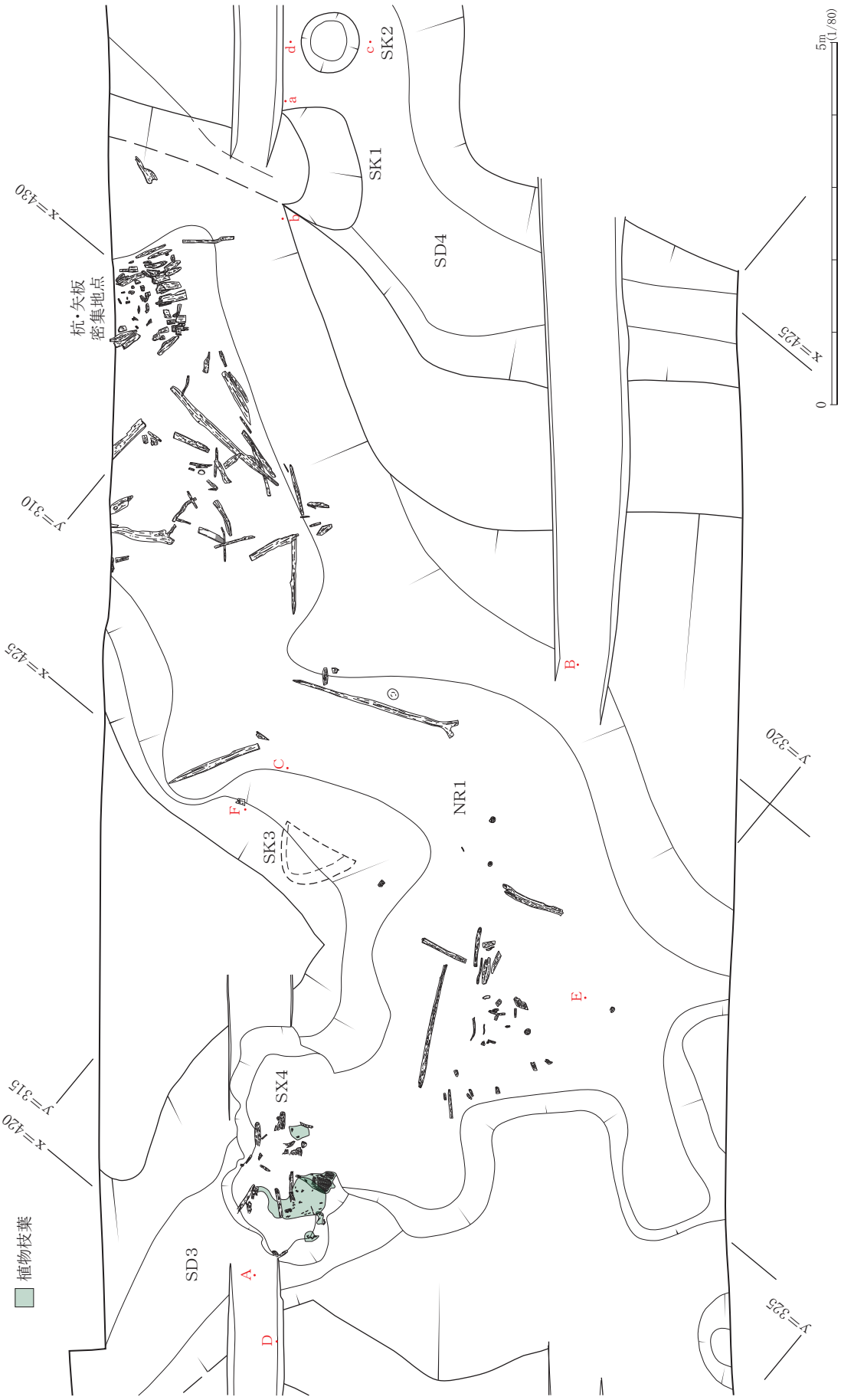
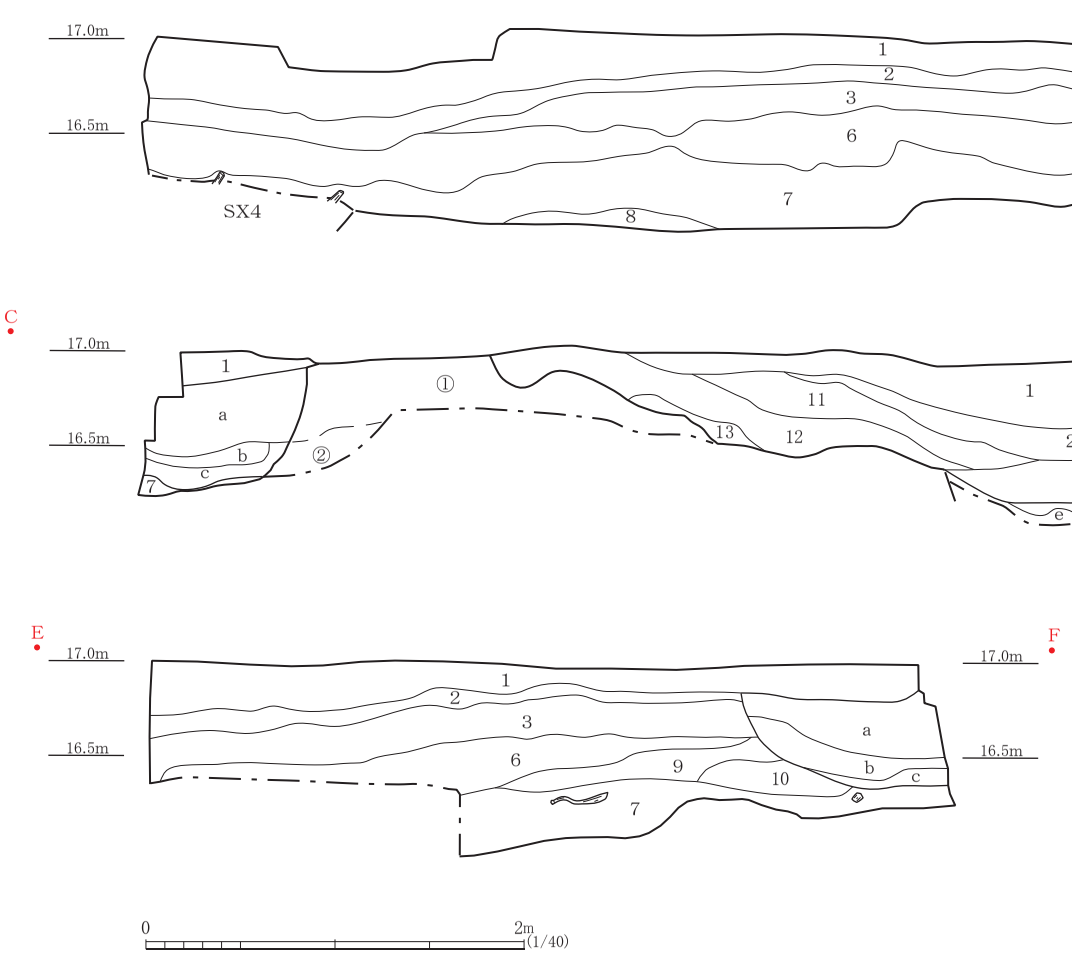


図13　北西部遺構群平面図



1 暗オリーブ色（2.5Y3/3）弱粘質土 ※0.3 ～ 0.7 ㎝の砂粒混ざる…NR1L1・SD3L1
2 黒褐色（10YR2/2）強粘質土 ※0.5 ～ 0.8 ㎝の砂粒少量混ざる…NR1L2・SD3L2
3 オリーブ黒色（2.5Y3/3）シルト質弱粘質土…NR4L3
4 オリーブ黒色（2.5Y3/3）弱粘質土 ※0.6 ～1㎝の砂粒多く混ざる…NR1L3
5 黒褐色（10YR3/1）粘質土 ※薄い砂層含む…NR1L3
6 灰色（7.5Y4/1）粘質土 ※下半に 0.1 ～ 0.5 ㎝φの砂層を含む…NR1L5・SD3L3
7 オリーブ黒色（5Y3/1）砂礫に黒色粘質土と灰色粘土ブロックが混ざる…NR1L5
8 灰色（7.5Y4/1）粘土…NR1L5
9 オリーブ黒色（2.5Y3/3）弱粘質土 ※0.6 ～1㎝の砂粒多く混ざる…NR1L3
10 灰色（7.5Y4/1）粘土 ※砂をブロック状に含む・木片を少量含む…NR1L3
11 暗褐色（10YR3/4）シルト質弱粘質土…SD3L2
12 暗褐色（10YR3/3）弱粘質土…SD3L2
13 黒褐色（10YR2/2）粘質土…SD3L2

a 暗褐色（10YR3/4）弱粘質土…SK1埋土
b 黒褐色（10YR3/1）粘質土 ※褐色粘質土ブロック混ざる…SK1埋土
c 黒色（10YR2/1）強粘質土…SK1埋土

d オリーブ黒色（5Y3/1）砂礫 ※砂礫 0.1 ～3㎝φ…SD3SX4埋土
e オリーブ黒色（10Y3/1）強粘質土 ※砂がブロック状に混ざる…SD3SX4埋土

① オリーブ色（5Y5/4）シルト…地山
② オリーブ黒色（5Y3/1）シルト…地山

図14 北西部遺構群（NR1・SD3・SX4）断面図



写真 56　北西部遺構群 北－南・東－西アゼ土層断面（北東から）



写真 57　北－南アゼ南部東面土層断面（東から）



写真 58　東－西アゼ東部北面土層断面（北から）



写真 59　北西－南東アゼ南西面土層断面（西から）



写真 60　北西－南東アゼSX4土層断面（西から）

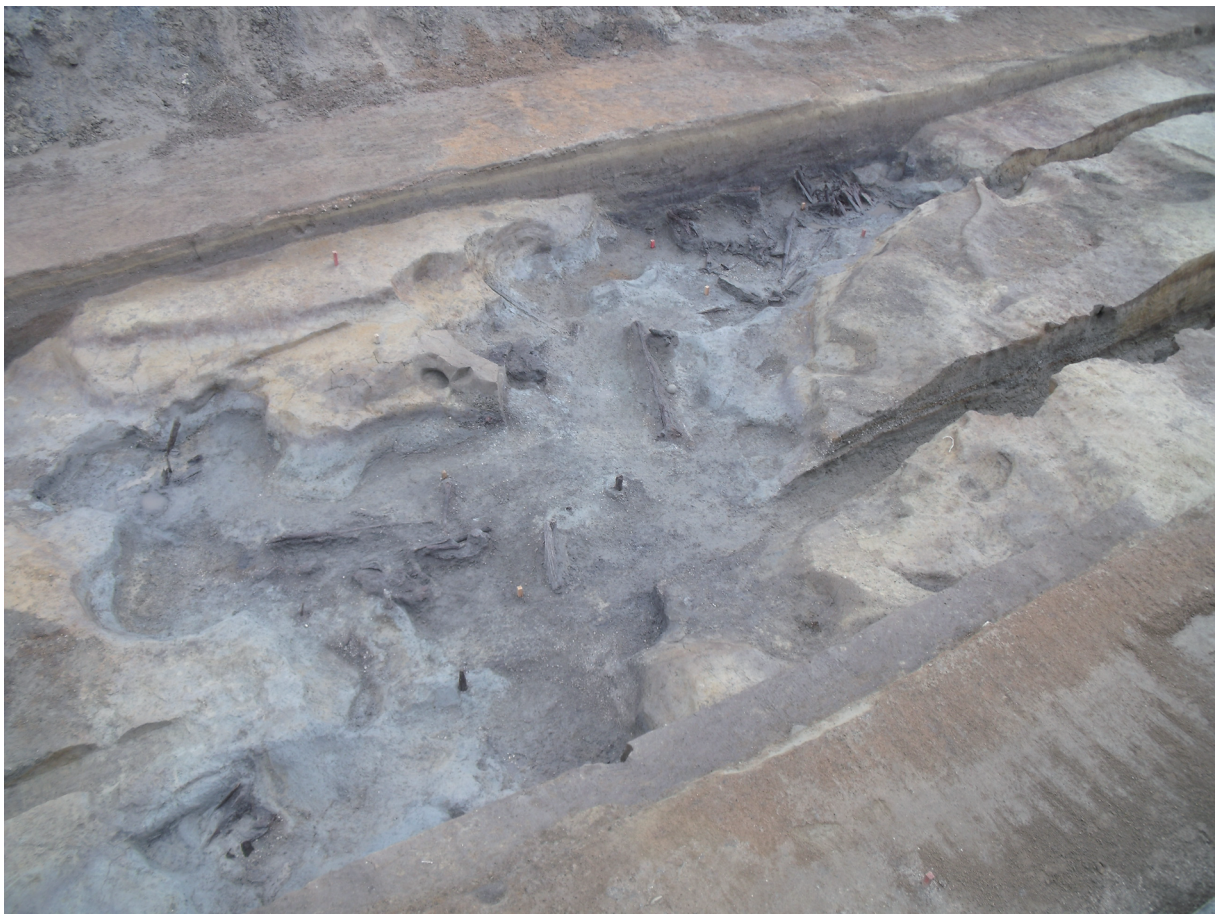


写真 61　北西部遺構群完掘状況（東から）



写真 62　NR1右岸完掘状況（東から）



写真 63　NR1河底遺物出土状況（南西から）



写真 64　NR1右岸杭・矢板密集地点（北東から）



写真 65　NR1右岸杭・矢板密集地点（上から）



写真 66　SX4完掘状況（南東から）



写真 67　SX4完掘状況（西から）



写真 68　SX4底面植物遺存体検出状況（南西から）

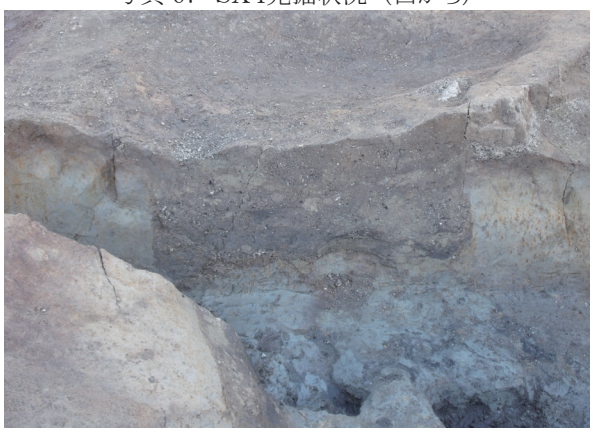
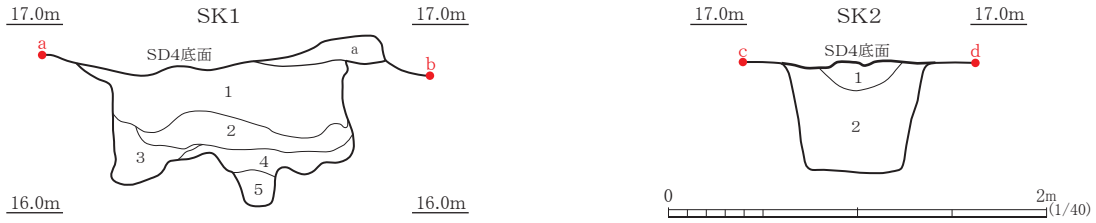


写真 69　SK1断面（北東から）



写真 70　SK2半裁状況（北西から）



【SK1】
1. 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）弱粘質土に褐色土ブロック多く混ざる
2. 黒色（2.5Y2/1）粘質土に暗オリーブ色土のブロックや層を含む
3. 黒褐色（2.5Y3/2）強粘質土と砂が互層をなす
4. オリーブ灰色（5GY5/1）シルトに暗褐色粘質土ブロックが混ざる
5. 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂と暗褐色粘質土の混合層

【SK2】
1. 浅い黄色（2.5Y7/3）砂質土
2. 黒褐色（2.5Y3/1）粘質土

【NR1】
a. 暗オリーブ色（2.5Y3/3）弱粘質土…NR1L1

図 15　遺構断面図

溝2（SD2a・b）・性格不明土壙状遺構1～3（SX1～3）（図16～19、写真71～85・88・89・93）

SD2a・bはNR1の南西約4mに隣接し、調査区内を北東－南西に走る溝である。平行する2条は埋土下層において同時に埋没していることが分かるが、土層断面を見ると、再掘削の様子がうかがわれることから、一定期間の使用が想定される（図17）。SD2aの左岸部とSD2bの右岸部に比して溝間の地山が低いことから、SD2a・bと表記しているものの、当遺構は溝の両側縁を掘り下げた幅6～8mの大溝と考えられる。なお、SD2a北東部はSD1により切り込まれており、SD2b埋土上部は近代の耕作により大きく破壊されている。前述のように、この近代の耕作によりSD3との切り合い関係が不明となっている。

埋土に遺物は希薄で、弥生土器と土師器が少量出土している。遺物を見る限りでは、弥生時代後期より埋没を開始し、古墳時代前期頃には完全埋没したと推定される。

SX1はSD2aの東側溝底に掘り込まれた土壙状の遺構である（図18）。平面形は長軸約2m、短軸約1.5mの楕円形を呈し、深さは約0.3mを測る（図17）。遺構底面と傾斜部には杭や矢板が乱雑に打ち込まれており、遺構の左傾斜部に密集する（写真73・75）。また、SX1の南西側（溝下流側）両側縁にも杭の抜き取り跡が多数見られる。

遺構底面の標高は16.2mを測り、検出後は調査期間を通して湧水が見られた。埋土は均質な黒褐色弱粘質土で、杭・矢板以外の遺物は含まれていなかった。

SX2はSD2bの東側溝底に掘り込まれた土壙状の遺構であり、SX1に並列している。平面形は長軸3.1m、短軸1.3mの長楕円形を呈する。深さは0.5mを測る。掘り方はSX1とやや異なり、長軸北東側は2段掘り状に、南西側は階段状に掘り込みを行っている。底面はSX1に比して小さく、径0.55mの円形を呈している（図18）。こちらも杭と矢板が打ち込まれていたが、遺構の北東掘り込み部から遺構の両側縁に列状に並んでおり、SX1とは相違を見せている（写真74・75）。

遺構底面の標高は15.8mを測り、SX1同様調査期間を通して湧水が見られた。 埋土は均質な黒色強粘質土で、こちらも杭・矢板以外の遺物は確認できなかった。

両者の機能に関しては、木製農工具などの未製品を水漬け状態で保管するための環状矢板杭列[註2]に類するものとも思われるが、前述の通り杭・矢板以外の木製品が全く見られないことから断定できない。また、NR1とSD3の接続部分に設けられた形態的に類似するSX3や、当調査区に隣接する第2体育館新営に伴う発掘調査にて検出された、大溝2と大溝3接続部分に設けられ、植物の枝葉など植物が遺存する土壙状遺構[註3]とは、設置位置や埋土内の堆積物において相違が見られる。両調査区での状況を考えると、同様の施設が周域に埋存している可能性は極めて高いと思われることから、今後の調査に期待し

たい。

SX3はSD2bの南西側に掘り込まれた土壙状の遺構で、SX1・2とは異なり溝に対して直交して設けられている。平面形は長軸6.2m×短軸2.6mの長楕円形を呈しており、深さは最深部で0.95mを測る（図17）。SD2bを通過した水は、SX3東南端部に流入し、オーバーフローした水が南西方向に流出する構造となっている。SX1・2同様、調査期間を通じで遺構底面からの湧水を見た。

この遺構で注目される点は、遺構のほぼ中央部に遺構長軸に直交する方向で、木製の柵状施設が設けられていたことである（写真78・80）。柵状施設は、9本の杭の上部に1本の横木が添えられた状態で確認されており、規模は横木幅1.1m、縦杭長約0.8mを測る。横木と縦杭は連結されていなかったが、植物等で緊縛されていた可能性を残す。北東方向にやや横倒しの状態で検出されており、縦杭の上面下位には網代編み製品が貼り付けられていた（図19右、写真81～84）。また、柵状施設の下面には枝葉がおよそ10㎝の厚みで敷き詰められていた（写真85）。

さらに、この柵状施設をはさみ南東と北西部には堆積物に大きな相違が見られる。SD2bから水が流入する南東部には、北端部に矢板が複数打ち込まれており、遺構内部には幾層にも枝葉層が重なり、これらの枝葉層に網代編み製品が重なる状態で複数検出された（写真76～68・80）。一方で北西部には顕著な枝葉層は見られず、北端部に自然木の集中箇所が見られるのみであった（写真79）。網代編み製品は、樹種鑑定の結果いずれもイネ科タケ亜科であることが判明した。枝葉層については、1層を対象に数枚のサンプリングを行い、樹種鑑定を実施したが、アカガシ、トチノキ、ゴヨウツツジ、メギ、ゴヨウツツジ、メギ、ニワトコ？、ノグルミ？、ハイノキ属？、ブナ属？など多様な樹種が確認された（本書付篇1参照）。枝葉層や網代編み製品については、SD2a・b、SX1・2には何ら痕跡が見られないことから、SX3に人為的に入れられた可能性が高い。

当遺構の機能に関しては、浅学のため他に類例を見出せていないが、中央の柵状施設や枝葉・網代編み製品の存在から、木器未製品の保管施設である可能性は低いと考えている。水の動きを復元すると、SD2bを辿った水が南東部に落ち込み、枝葉・網代編み製品層を経て柵状施設を通過し、遺構北西部の空間に溜まることとなる。これらの状況を考えるに、飲用を含む生活用水の取水施設であった可能性が高いのではなかろうか。

山口県の弥生時代集落遺跡では、これまで明確な井戸は確認されておらず、当県の弥生時代の大きな特徴の一つとなっている。これは、3方を海に囲まれ、小河川に恵まれている[註5]という地理的環境によると推定される。以前より漠然と「河川の水を活用していた」と推測していたが、これが生活用水の取水施設であれば、初の具体的な事例となる。埋蔵文化財調査にて自然河川や大溝が検出された場合、しばしば部分的なトレンチ調査のみ実施される状況を見かけるが、今後全面的な掘削調査の実施が増えれば、類似例が増加すると思われる。SX1・2同様、今後の調査に期待したい。

溝1（SD1a・b）（図12・16・17、写真55・86・87・92）

SD2bの南東に隣接する北東－南西方向に走る溝で、SD1bの掘り直しがSD1aである。SD1bは調査区東側でSD2bを切り込んでいる。2条の溝の重複部分は、排水枡・ヒューム管および水道管取設により大きく破壊を受けていたため、平面的にSD1aを検出することは困難であった（図12西壁断面図・図16、写真55）。規模としては、SD1aは幅2.2m以上で深さ約0.5m、SD1bは1.8m以上で深さ約0.7mを測る。上部は後世の削平を受けていることから、元来の規模はさらに大きくなる。両者の埋土は類似しており、黒オリーブ・黒褐色系統の粘質土・砂質土である。

埋土中の遺物は極めて希薄で、土師器小片が多い。ある程度時期の分かるものとしては、SD1a埋土

中層から近世の粗陶器が1点出土したに過ぎない。規模や埋土の類似性から、両者はともに近世の用水路と推測される。

遺物包含層（図12、写真88～95）

遺物包含層は、調査区北西部の棚田が1段下がる地点から、調査区南東部のSD2にかけて、幅約30mの範囲で確認された。調査区北西部は棚田を設ける際に、調査区南東部は元来微高地であった地点を大学造成時に削平した際に消滅したと考えられる。

暗オリーブ褐色粘質土である遺物包含層は、0.2～0.4mと厚く堆積しており、NR1左岸とSD2右岸の間は下位にもう1層（灰オリーブ色粘質土）が厚さ約0.2mで堆積している。確認時に前者を遺物包含層上層、後者を遺物包含層下層と名付けたが、人力掘削の効率化のため、層位的な掘削を行うことができなかった。

包含される遺物は、弥生時代から中世にかけてのものであり、包含層の形成時期をうかがい知ることができる一方で、量的には希薄であった。この事実は、弥生時代以降当地周辺が集落域ではなく農耕地として利用されていたことを物語っている。

【註】

1）横山成己（2016）「図書館改修工事及び環境整備（図書館周辺道路迂回）工事に伴う本発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』，山口

2）佐藤浩司（2017）「豊前地域の木製農具」，第183回九州古文化研究会・第2回弥生時代研究部会資料

3）村田裕一・中村仁美（2000）「吉田構内第2屋内運動場新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅣ』,山口

4）井戸として可能性が高いものに、吉永遺跡（下関市豊浦町）V地区のSK3115が挙げられる。長径0.84m、短径0.74mの円形土壙で、深さ約1.2m地点で湧水のため掘削が断念されている遺構である。

向上昭彦ほか（2003）『吉永遺跡（Ｖ地区）』山口県埋蔵文化財センター調査報告第38集，（財）山口県埋蔵文化財センター（編），山口

5）平成28年4月30日現在、二級河川数・河川延長は北海道（467、4,287.9km）に次ぐ全国2位（434、2,211.7km）である（総務省統計局公表）。

（5）遺物（図20～25、写真96～101、表5・6）

【土器】

ここでは層位・遺構ごとに概要を記す。

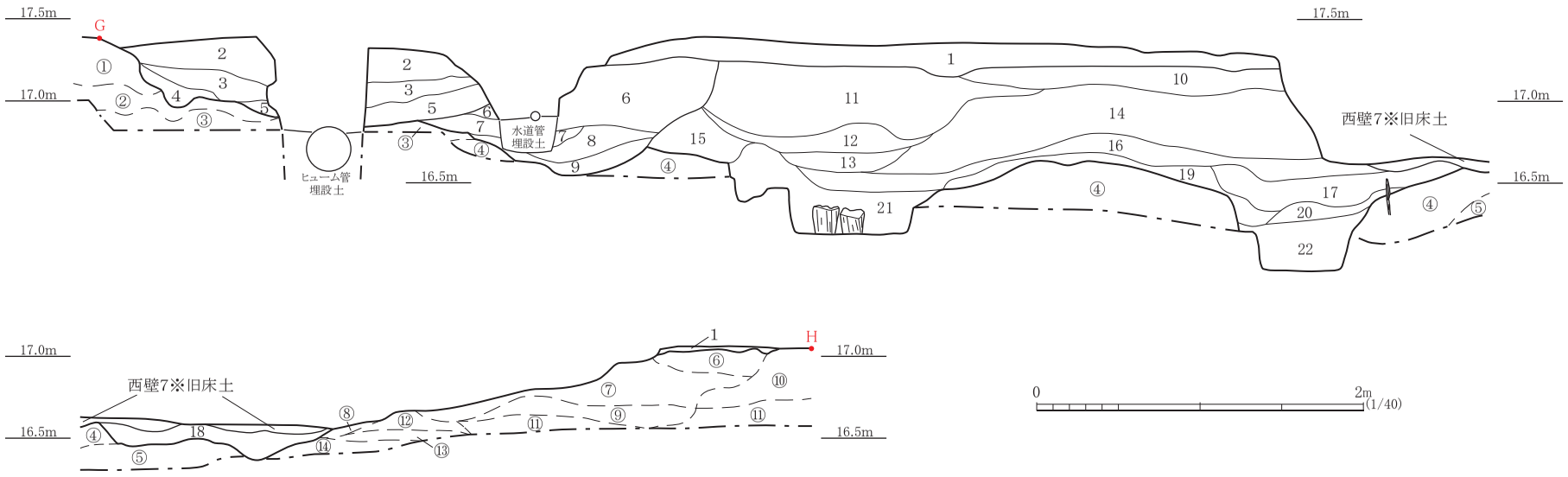
遺物包含層（図20の1～12、写真96・97）

1～4は弥生土器。**1**は甕の口縁部片。「く」の字状に短く屈曲させ、口縁端部を丸く収める。体部内外面はハケ後ナデが施される。2・3は底部片。**2**は厚手平底の底部片で、直立気味に体部が立ち上がる。底部復元径は8.0㎝を測る。底部内外面は指押さえおよびナデにて調整され、体部外面はハケ調整後ナデが施される。**3**も平底の底部片であるが、外方に大きく開いて体部が立ち上がることから、壺底部と見られる。小片のため底部径の復元不能。調整は2と同様である。4は高坏の脚柱部片。残存長5.8㎝、脚柱径5.4㎝を測る。内面調整は指押さえおよびナデ、外面は風化が著しく観察不能である。

5・6は古墳時代に所属する。**5**は須恵器壺の底－体部片。残高6.4㎝、底部復元径10.4㎝、残存体部復元径22.3㎝を測る。体部は内外面とも回転ナデが施されているが、外面底部付近はヘラ削りが施されている。**6**は土師器甕。頸部を「く」の字状に屈曲させ、口縁端部は鈍く面を取る。復元口径14.7㎝、残



図16　北西部遺構群平面図



1 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土…遺物包含層

2 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 ※2㎝の灰色土ブロック混ざる…SD1aL1
3 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 ※白色シルトを薄い層状に含む…SD1aL2
4 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂質土 ※2層に似たブロック多く混ざる…SD1aL3
5 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘質土…SD1aL3
6 黒褐色 (10YR3/2) 弱粘質土…SD1bL1
7 暗オリーブ褐色 (2.5YR3/2) 砂質土…SD1bL2
8 オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト ※粘質土ブロック混ざる…SD1bL2
9 黒褐色 (2.5Y3/1) 強粘質土…SD1bL3

10 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土…SD2L1
11 黒褐色 (10YR2/3) 砂混じり粘質土 ※砂 0.3 ～ 1.5 ㎝ φ …SD2L1
12 黄灰色 (2.5Y4/1) 弱粘質土 ※下半に砂を多く含む…SD2aL1
13 黒褐色 (10YR3/1) 弱粘質土…SD2aL2
14 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土 ※砂 0.5 ～ 0.7 ㎝…SD2L2
15 黒褐色 (10YR3/2) 弱粘質土 ※幅2～3㎝の砂層を含む…SD2L2
16 黒褐色 (10YR3/1) 弱粘質土…SD2L3
17 黒色 (10YR1.7/1) 強粘質土…SD2L3
18 黒褐色 (2.5YR3/2) 粘質土 ※オリーブ褐色の粘土ブロック混ざる…SD2L3
19 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 ※0.5 ～ 0.7 ㎝の砂粒多く混ざる…SD2L3
20 黒褐色 (10YR3/1) 粘土混じり砂礫…SD2L3
21 黒褐色 (10YR3/1) 弱粘質土…SD2SX1a埋土
22 黒色 (10YR1.7/1) 強粘質土…SD2SXb埋土

①黄褐色 (2.5Y5/4) シルト
②黒色 (2.5Y2/1) シルト
③暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト
④灰色 (5Y4/1) シルト ※帯状黒色層を含む
⑤灰色 (7.5Y4/1) 砂礫
⑥黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
⑦灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂礫
⑧灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂礫
⑨黄褐色 (10YR5/6) 砂礫
⑩黄褐色 (2.5Y5/4) シルト
⑪灰オリーブ (5Y5/2) 砂礫
⑫オリーブ褐色 (2.5YR4/6) シルト ※粘土ブロック含む
⑬灰黄褐色 (10YR4/2) シルト ※酸化マンガン含む
⑭灰オリーブ (5Y4/2) シルト ※酸化マンガン含む

図17　南東部遺構群（SD1・2）土層断面図



図18　SX1・2平面図・断面図

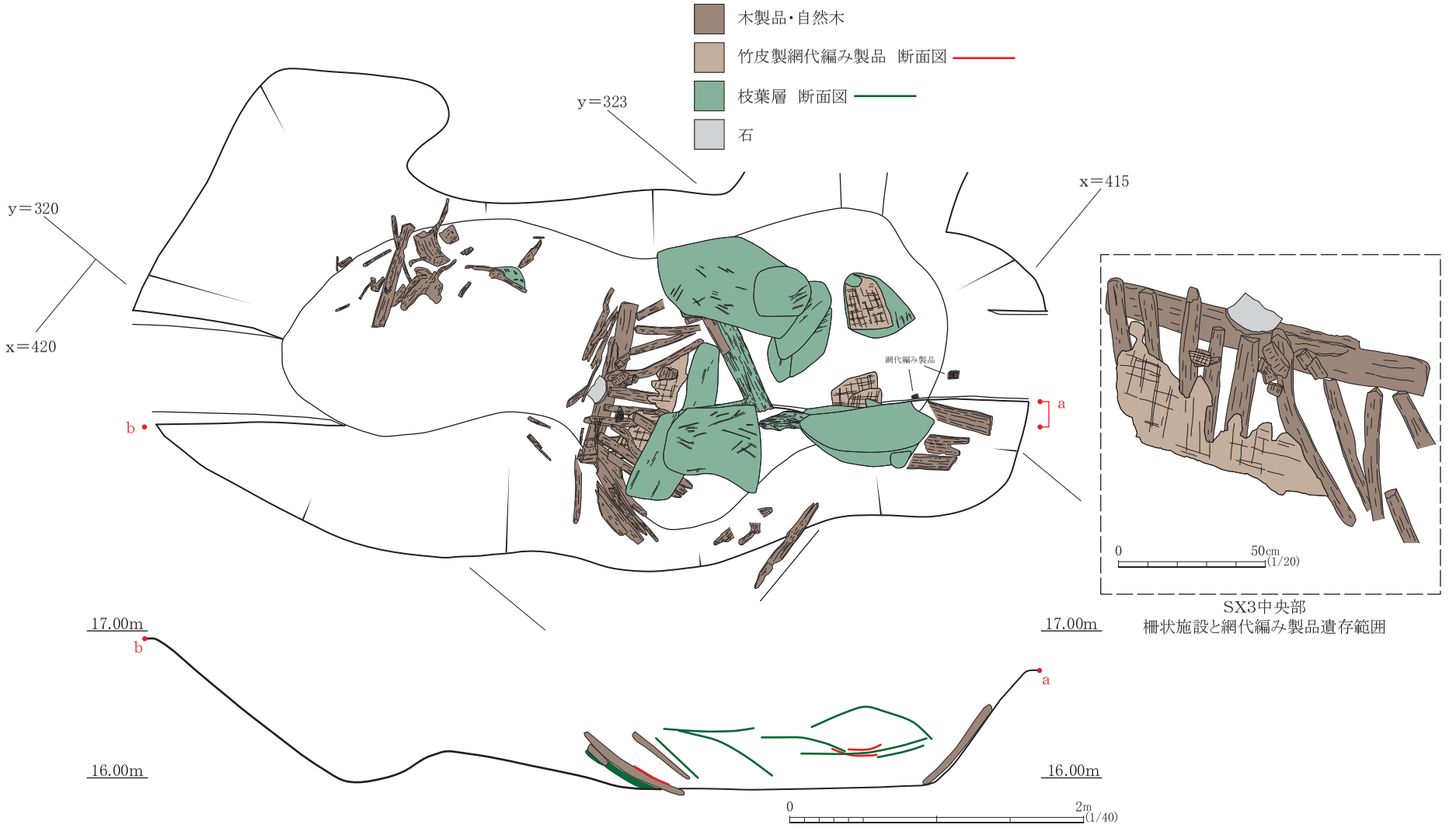


図19　SX3平面図・断面図



写真 71　SD2a遺物出土状況（北東から）



写真 72　SD2土層断面（北から）



写真 73　SX1（南西から）



写真 74　SX2（南西から）



写真 75　SD2完掘状況（北東から）



写真 76　SX3掘削状況（南から）



写真 77　SX3竹製網代編み製品検出状況（南から）



写真 78　SX3網代編み製品・枝葉層検出状況（南東から）



写真 79　SX3網代編み製品・枝葉層検出状況（北西から）



写真 80　SX3柵状施設・イネ科植物層検出状況（南東から）



写真 81　SX3柵状施設・網代編み製品検出状況（南から）



写真 82　網代編み製品左側近接（南東から）



写真 83　網代編み製品右側近接（南東から）



写真 84　SX3柵状施設（西から）



写真 85　柵状施設裏側枝葉層（北西から）



写真 86　遺構完掘状況（南東から）



写真 87　調査区南東部（西から）



写真 88　調査区北東壁（SD1・SD2a）土層断面（南西から）



写真 89　調査区北東壁（SD2b）土層断面（南西から）



写真 90　調査区北東壁（NR1）土層断面（南西から）



写真 91　調査区北東壁（SD4）土層断面（南西から）



写真 92　調査区南西壁（SD1）土層断面（北東から）



写真 93　調査区南西壁（SD2）土層断面（北東から）



写真 94　調査区南西壁（SD3）土層断面（北東から）



写真 95　調査区南西壁（NR1）土層断面（東から）

存体部復元径20.8㎝、口縁下残長10.8㎝を測る。口縁外面および内面は横ナデが施され、体部外面は縦ハケ後にナデが施されている。

7～11は古代に所属する。**7**は都城系土師器の皿である。復元口径16.5㎝、復元底部径5.0㎝、器高2.5㎝を測る。器壁は底部で6.5㎜とやや厚めである。内外面とも摩滅が激しく、明確なミガキおよび暗文は観察できない。**8**は須恵器坏蓋口縁部片。口縁をほぼ直角に下垂させ、端部を丸く収める。内外面ともに回転ナデ調整。小片のため口径復元不能である。**9**は須恵器坏口縁－体部片。小片のため口径復元不能。直線的に体部から口縁に開き、口縁端部を丸く収める。内外面とも回転ナデ調整。**10**は須恵器高台付坏の底－体部片。高台外端復元径8.0㎝、残高2.3㎝を測る。底部外端に断面方形の小ぶりな高台がやや外方に張り出して付く。体部は外方にやや開き気味に立ち上がる。体部内外面回転ナデ調整、底部内面はナデ、外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。**11**は須恵器高坏の裾部片か。小片のため裾部径復元不能である。端部を鳥嘴状に外方につまみ出し、外端に沈線を1条巡らせる。内外面とも回転ナデ調整。

中世に所属する土器で、図化可能品は1点である。**12**は瓦質土器鍋の口縁－体部片。小片のため口径復元不能。口縁をわずかに外反させ、外端部を肥厚させる。口縁は内外面とも横ナデ、体部外面は指押さえ後ナデ、内面は横ハケが施される。炭素の吸着があまく、内外面とも灰白色を呈する。

NR1(図20・21の13～37、写真97・98)

13～16は埋土L2出土。いずれも弥生土器である。**13**は弱く外反する甕口縁部片。内外面とも横ナデが施される。**14**は壺肩部片。頸部直下の部位と見られ、外面に無軸の羽状文が施される。**15**も壺の肩部片であり、14同様に無軸の羽状文が施される。内面はハケ後ナデ、外面はナデ後部分的にヘラミガキが施されている。16も壺の肩部片。器壁が8㎜と厚いことから、中－大型品と見られる。外面に2条の沈線が残る。

17～19は埋土L3出土。**17**は弥生土器底部。平底で底部径8.0㎝、残高2.6㎝を測る。**18**は土師器甕の口縁部片であるが、小片のため口径復元不能。口縁は緩やかに外反し、端部を丸く収めている。外面は縦ハケ、内面はハケを丁寧にナデ消している。**19**も土師器甕。口縁部は欠失しており、体部上半と下半は接合しないが、出土状況から同一個体であることが間違いないため、図上復元を行った。やや下膨れの卵形体部に小ぶりな平底が付き、頸部は大きく外反する。底部径5.0㎝、復元体部径20.5㎝、復元残高23.4㎝を測る。体部外面は中－下位に横方向、上位に斜め方向の叩きが施される。内面は中位に横方向、下位と上位に縦方向のハケで器面調整されるが、上位はナデ消しが図られている。所属時期は、古墳時代前期初頭と見られる。

20～25は埋土L4出土。**20**は遺物出土時にNR1L4か、L4下位の地山(遺構基盤層)の一つとなっている砂礫層のどちらに所属するか判断が付かなかった資料であるが、本稿ではL4出土品として取り扱かっておく。縄文時代晩期の刻目突帯文土器深鉢口縁部片で、口唇と突帯に刻目を施す。全面に煤が付着する。**21**は弥生土器甕の口縁部片。外端に刻目を施しており、煤の付着が見られる。外面は斜め、内面は横方向のハケが見られる。20・21とも小片のため口径復元不能。**22**は弥生土器甕の体部片。外面は沈線が1条残り、縦ハケが施されている。器壁が1㎝と厚く、中－大型の甕と見られる。**23**は弥生土器壺の口縁部片である。大きく外方に開く口縁で、端部を尖り気味に丸く収める。**24**は弥生土器壺の肩部片。幅太の沈線が1条巡らされており、外面は横方向のヘラミガキが丁寧に施されている。器壁が1㎝と厚いことから、中－大型の壺と見られる。**25**も弥生土器壺の肩部片。外面に2条の沈線が残る。内外面ともにナデ調整。

26～34は埋土最下層であるL5出土。いずれも弥生土器壺で、体部内外面はいずれもナデ後にヘラミガキが施されている。**26**は壺の口縁部片。頸部に段を有し、短く外反する口縁は端部に鈍く面を取っている。内外面ともヘラミガキが丁寧に施されている。復元口径14.0cm、口縁下の残高2.2cmを測る。**27**は壺の底－体部片である。やや上げ底状の底部から体部が大きく膨らむ。底部径8.0cm、残存体部径21.5cm、残高7.2cmを測る。体部内外面とも丁寧にヘラミガキが施されている。**28**も壺の底部片。復元底部径8.6cm、残高1.9cmを測る。平底で、体部は直立気味に立ち上がるようである。他の弥生土器と異なり、胎土に角閃石を多く含む。搬入品であろうか。**29**は壺の体部片。26と同一個体の可能性がある。**30**は壺の肩部片。沈線が2条巡らされる。**31**も壺の肩部片であるが、31に比して器壁が薄い。上下2箇所に2条の微弱な沈線が巡らされている。**32・33・34**も壺肩部片で、32は縦方向に3条、33は縦方向に5条の沈線が施されており、34には木葉文が施文されている。

35～37はNR1埋土の土層観察用アゼ解体時に出土した。いずれも弥生土器である。所属層位は37が埋土L1～2であることは確実であるが、他は不明である。**35**は壺の頸部片。特徴から26・29と同一個体の可能性がある。**36**は壺腹部片。微弱な2条の沈線が巡らされており、器壁の薄さからも31と同一個体である可能性が高い。**37**は厚手平底の底部である。底部径8.2cm、残高2.9cmを測る。

埋土最下層出土土器は弥生時代前期に所属すると見られ、図化不能であった小片を含め、そのいずれもが壺であることは注目に値する。弥生時代前期における当地周辺での土器の使用状況を反映している可能性が高く、歴史環境を復元する上で重要な資料となる。

SD1a(図21の38、写真98)

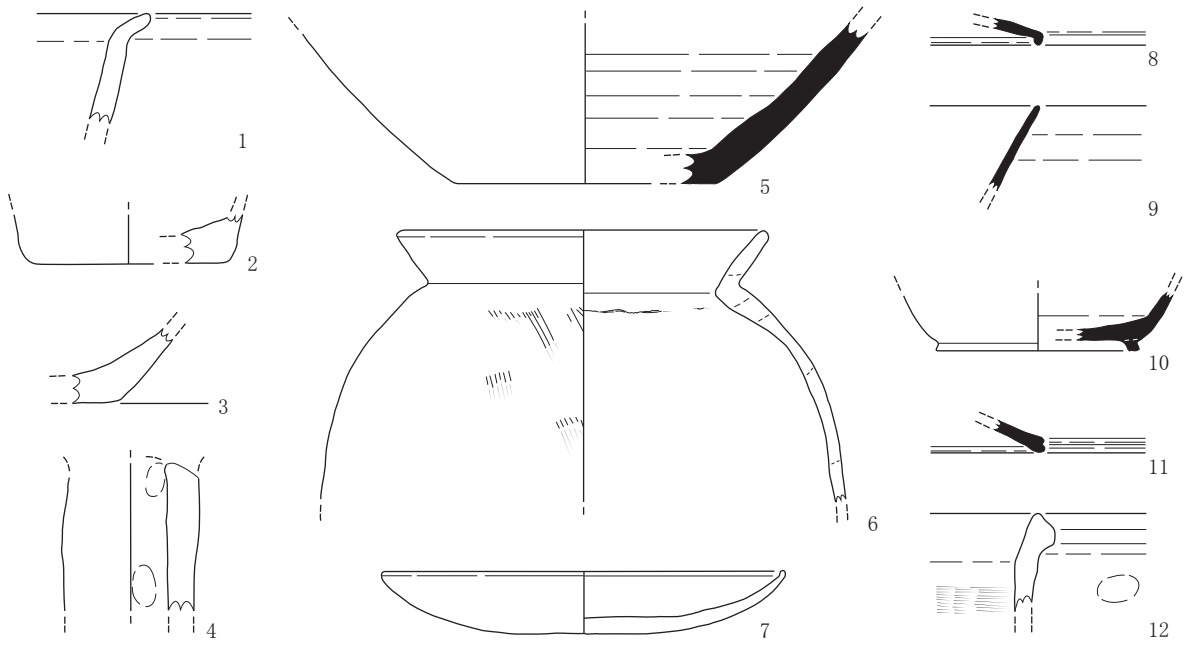
埋土L2出土である。38は粗陶器甕の体部片。外面は叩き後ナデ、内面当て具痕もナデ消しが図られている。

SD2(図21・22の39～45、写真98・99)

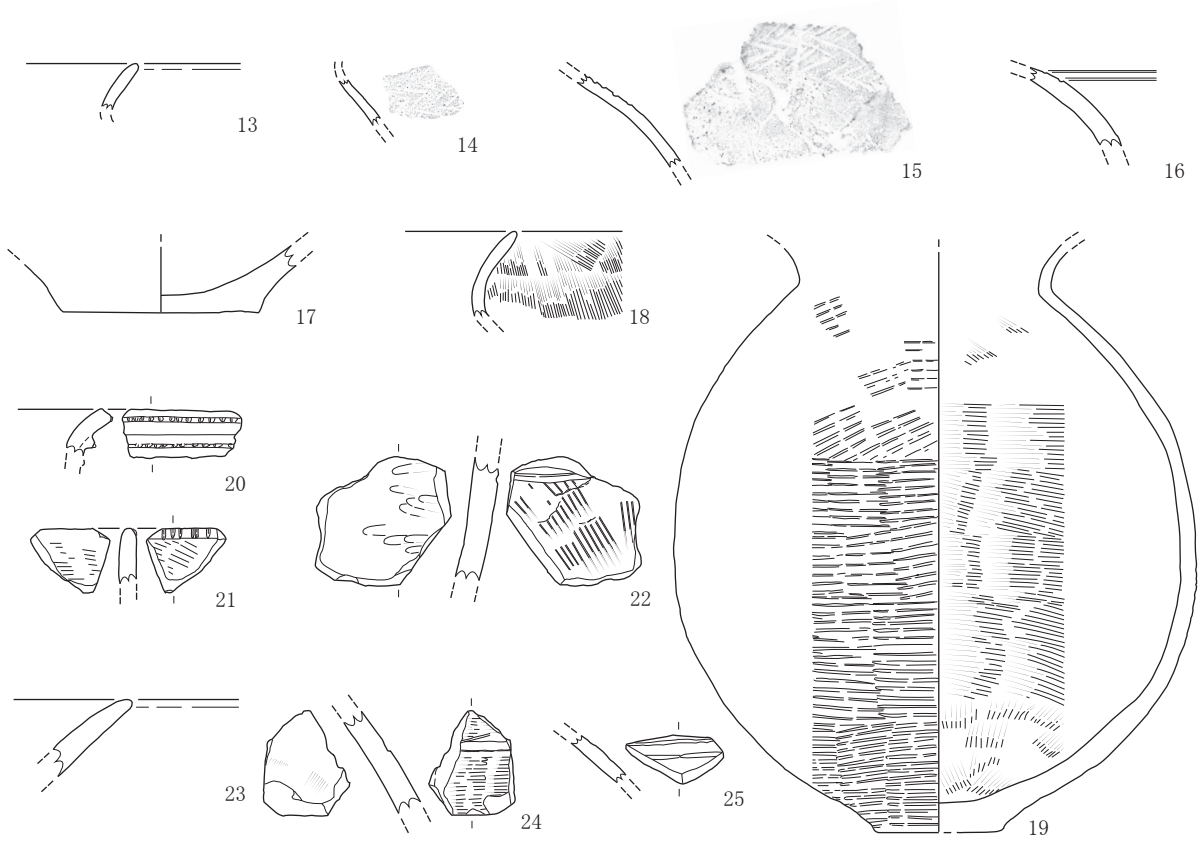
39～43は埋土最上層であるL1出土。39・40は弥生時代後期に所属する甕で、**39**は砲弾形の体部に大ぶりな平底が付く。復元底部径6.8cm、復元残存体部径22.4cm、残高15.7cmを測る。体部外面には縦ハケが、内面には縦方向のケズリが施されている。**40**は底部が欠失している。腹部のやや膨らむ体部を有し、頸部が強く屈曲し口縁が大きく開く。復元口径19.6cm、復元体部最大径20.8cm、口縁下残高20.7cmを測る。外面は口縁以下縦ハケによる器面調整が行われ、内面は口縁が横ハケ後ナデ、体部下位は縦方向のケズリ、中位以上はナデが施される。**41**は弥生土器甕の底－体部片。厚手の平底から体部が緩やかに湾曲しながら立ち上がる。底部および体部とも二次焼成により器面が荒れている。底部径4.8cm、残高4.2cmを測る。**42**は土師器甕の口縁部片。外反する口縁の端部を丸く収める。内外面のハケはナデ消しが図られている。復元口径16.2cm。**43**は土師器の小型甕。煮炊きに使用されたようで、二次焼成を受けており、底部は爆ぜ、体部には煤が付着している。歪みが著しく、底部で接地すると口縁が大きく斜めに傾く。復元口径10.8cm、復元最大体部径16cm、残高15.7cmを測る。口縁部外面はナデ、内面は横ハケ後ナデが施される。体部外面はハケ後部分的にナデ、内面は上位は横方向のケズリ、下位はハケ後ナデ消しが行われている。古墳時代前期の所属と見られる。

44は埋土下層であるL3出土の直口壺。器壁が9mmと厚く、強く張る肩部から口縁が直立気味に立ち上がる。口縁端部は明瞭に面を取る。口縁は内外面とも横方向のヘラミガキが施される。復元口径11.4cm、残高6.0cm。

45は土層観察用アゼ解体時の出土で、所属層位不明。弥生土器鉢の口縁－体部片で、口縁は外反する。体部は内外面とも横方向のヘラミガキが施される。小片のため口径復元不能。



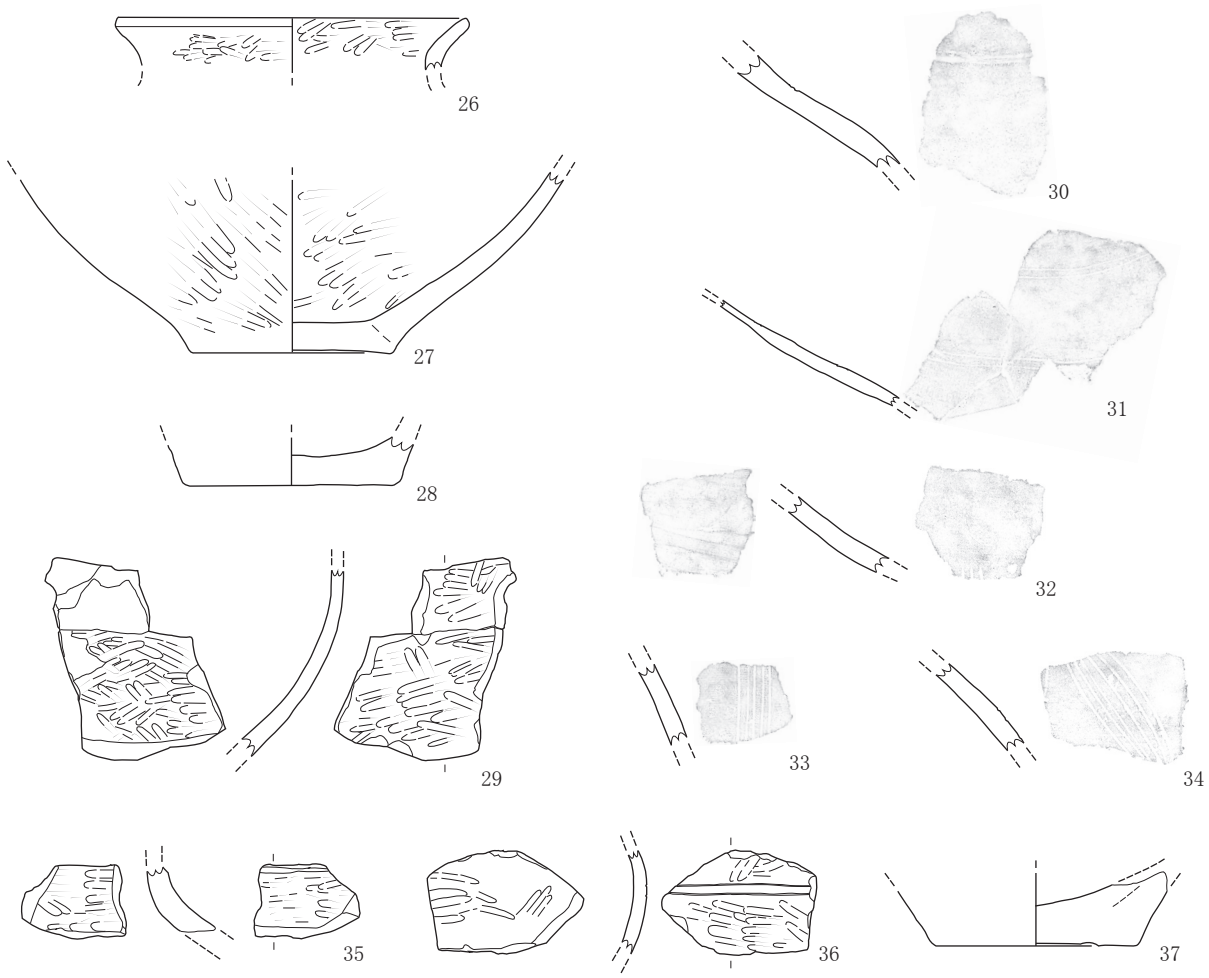
遺物包含層



13 ～ 16 :L2
17 ～ 19 :L3
20 ～ 25 :L4

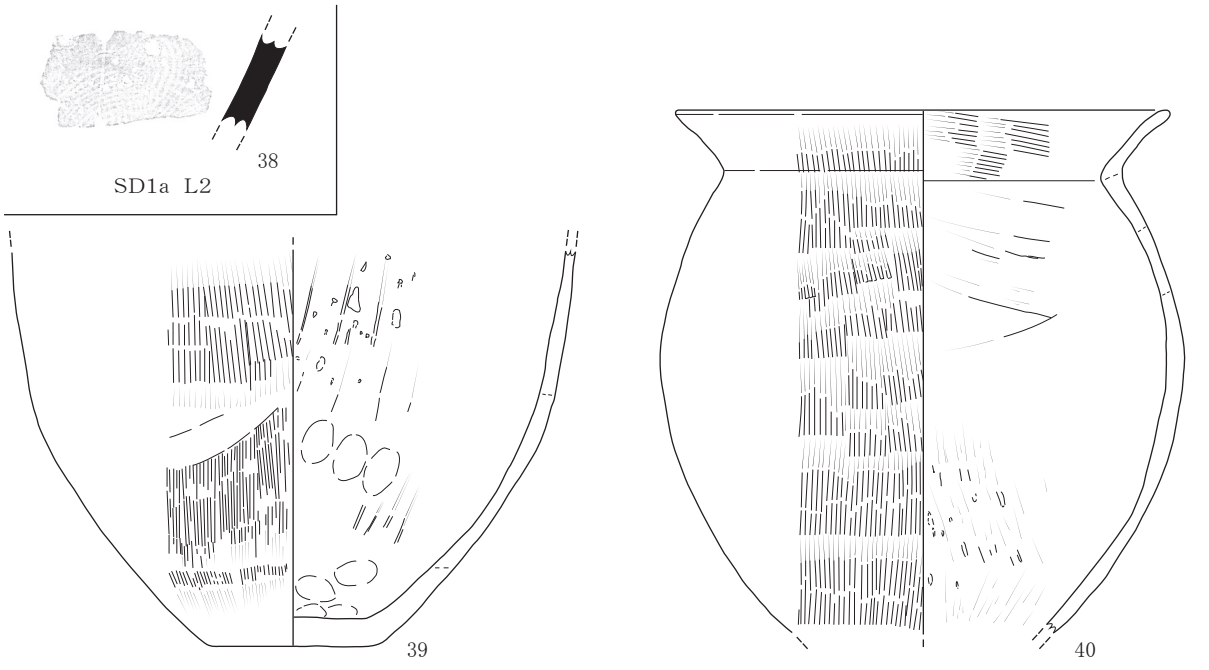
NR1（自然河川）

図 20　出土遺物（土器）実測図①



26 ～ 34 :L5
35 ～ 37 : アゼ中 ※37 はL1～2

NR1（自然河川）

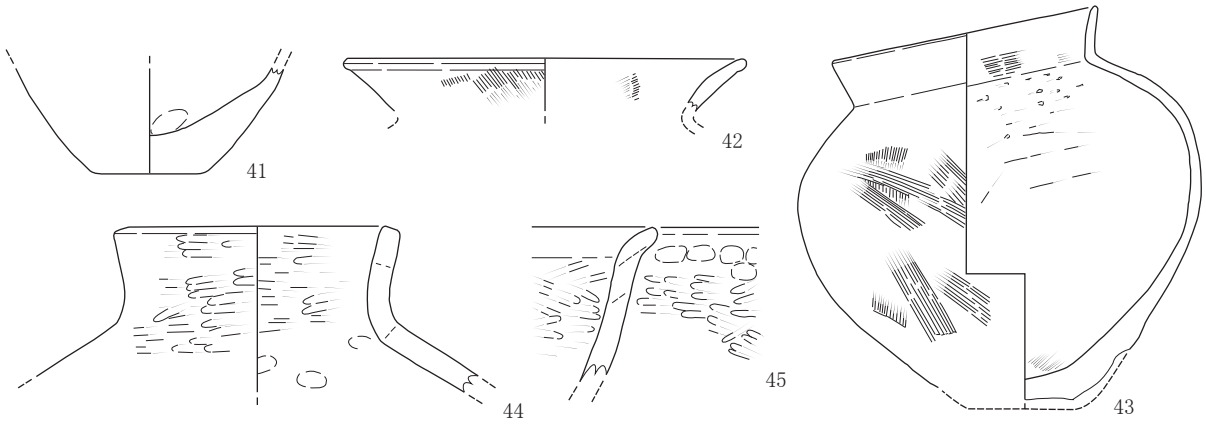


39・40 :L1

SD2

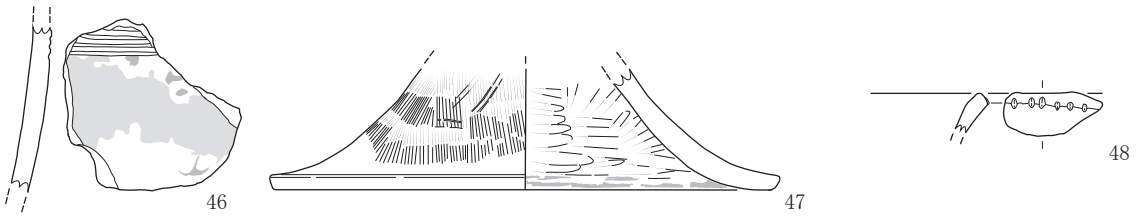
0 10cm (1/3)

図 21 出土遺物（土器）実測図②

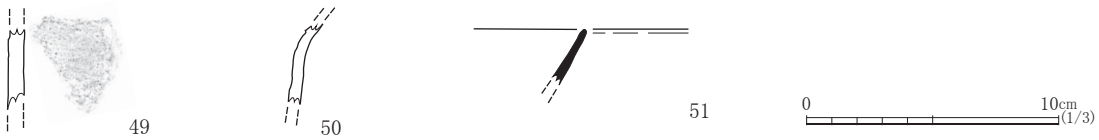


41 ～ 43 :L1　44 :L3　45 : アゼ中

SD2

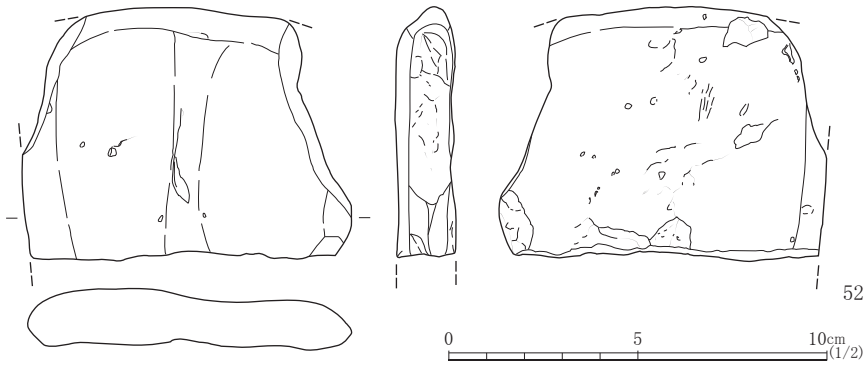


SD3 L3　　SD4 L1



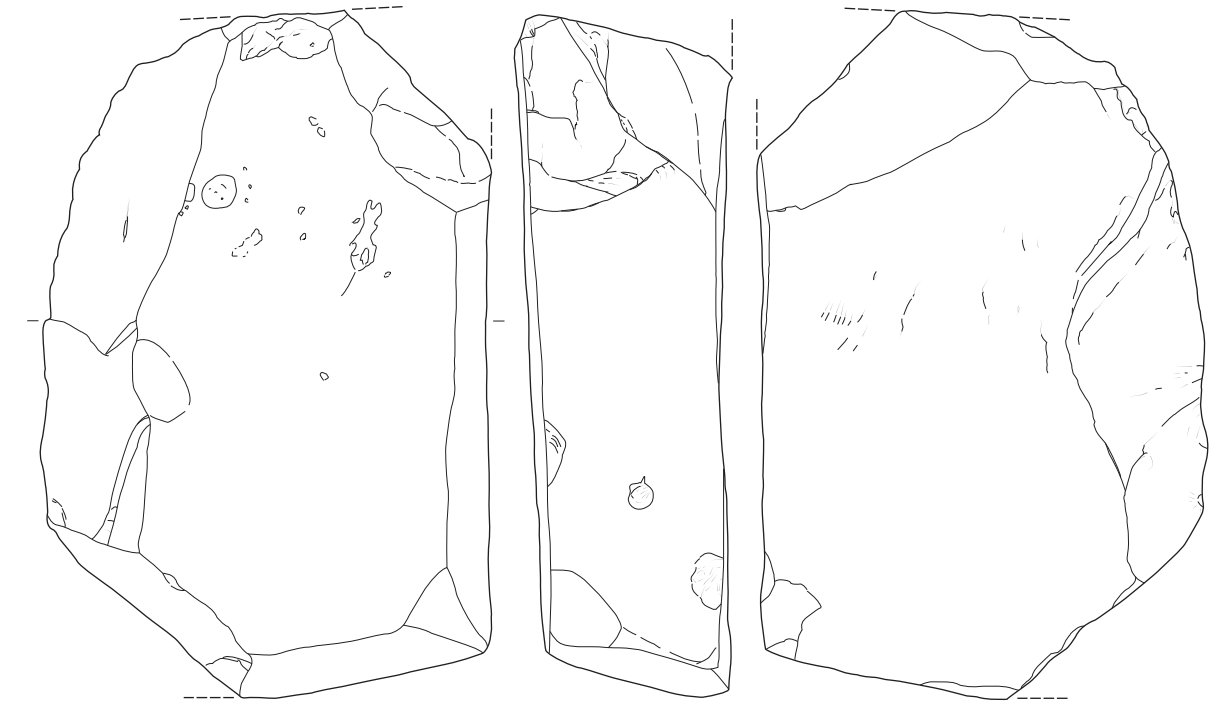
遺構面基盤層　　旧耕土

図 22 出土遺物（土器）実測図③

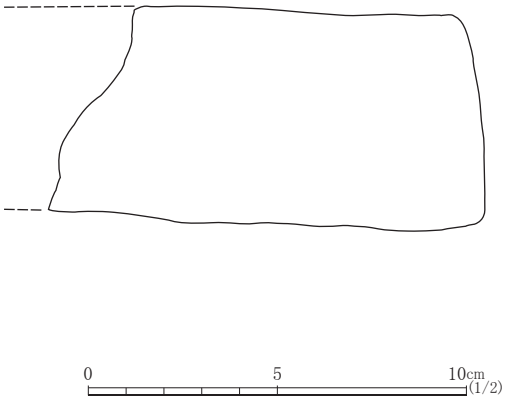


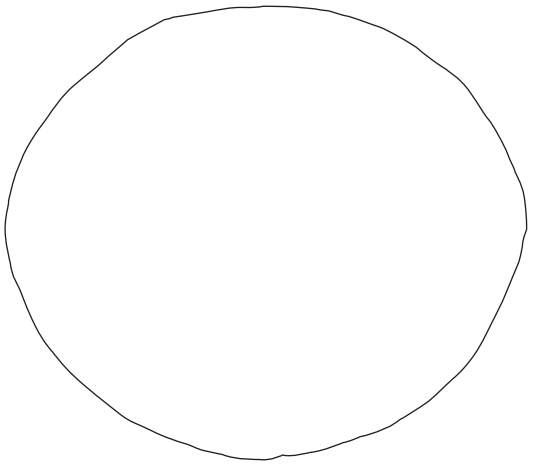
NR1（自然河川）

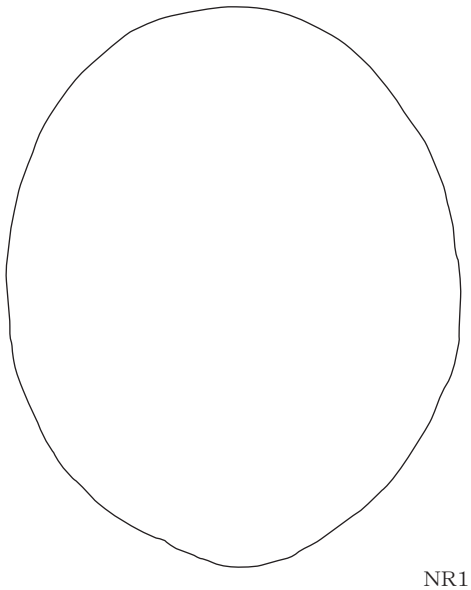
図 23 出土遺物（石器）実測図①

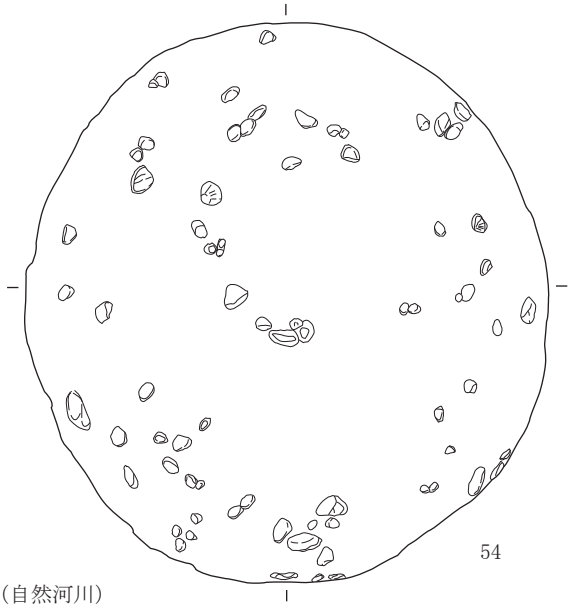


53









54

NR1（自然河川）

図 24　出土遺物（石器）実測図②

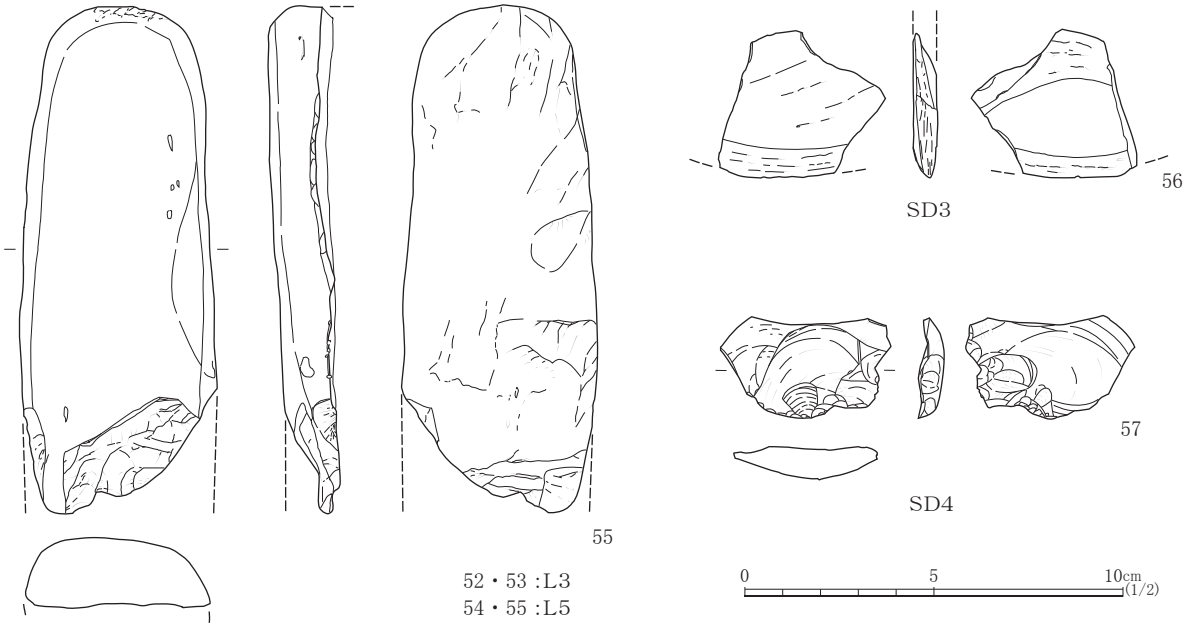


図 25　出土遺物（石器）実測図③

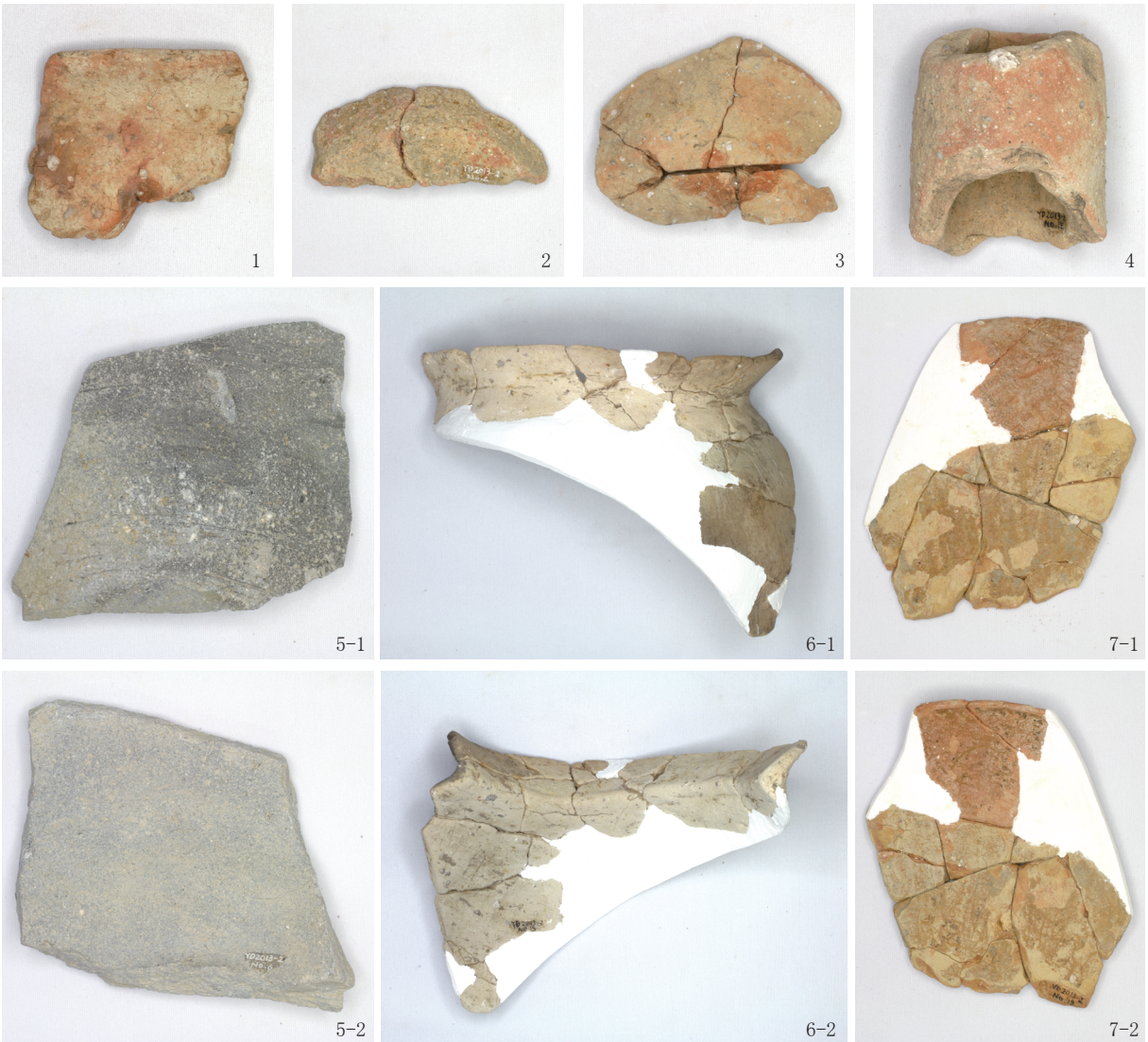


写真 96　出土遺物（土器）①

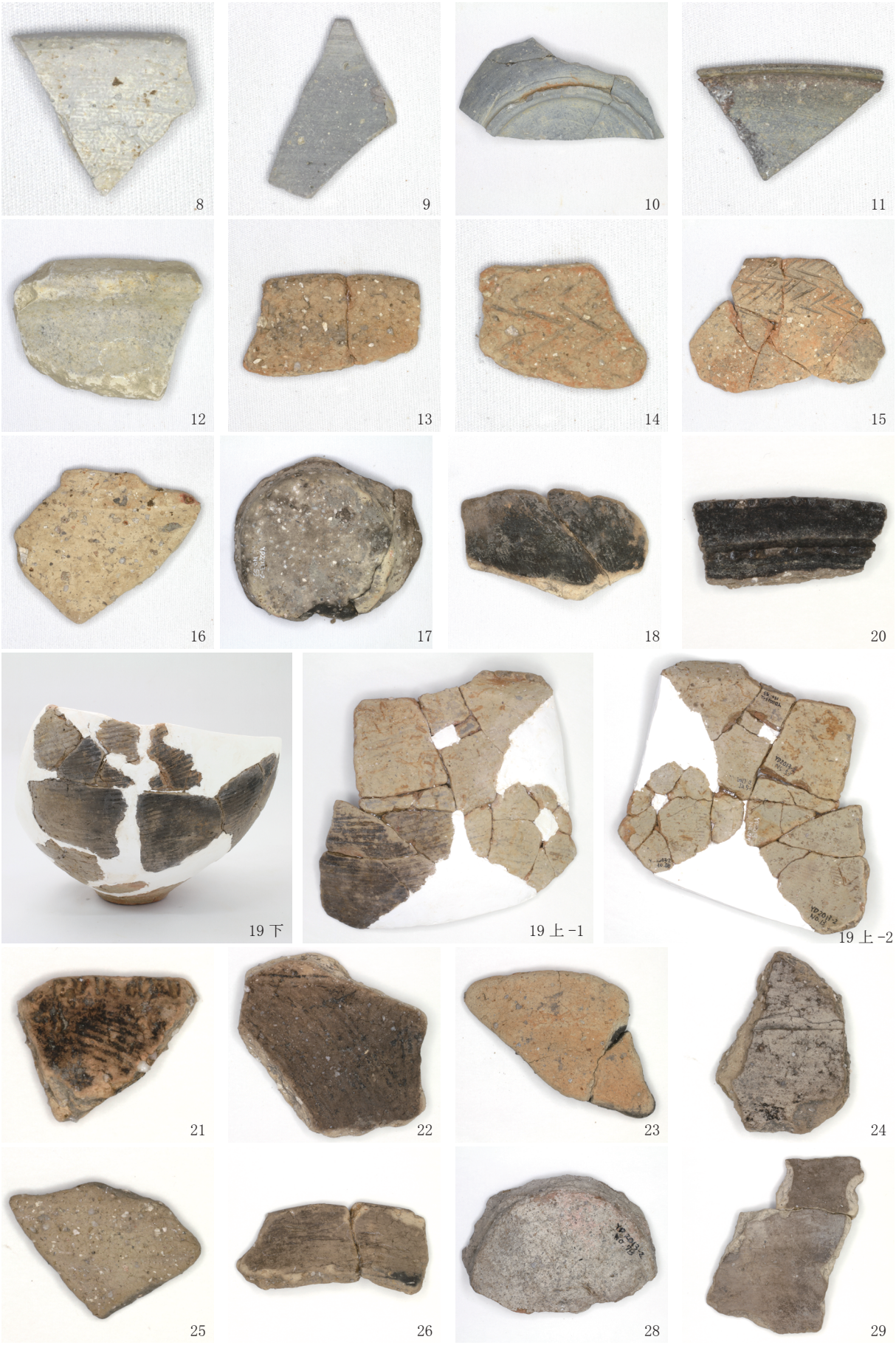


写真 97　出土遺物（土器)②



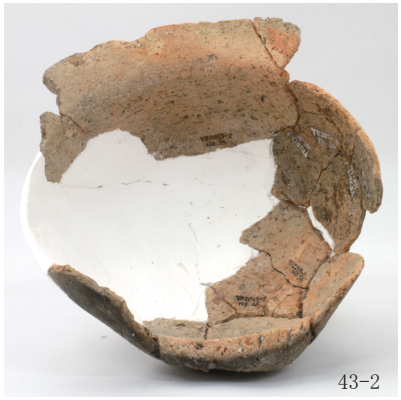
写真 98　出土遺物（土器)③


40-1


43-1


44


40-2

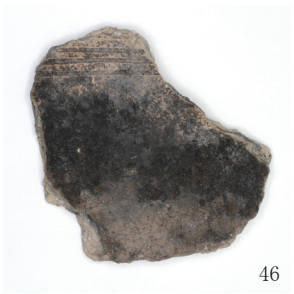

43-2

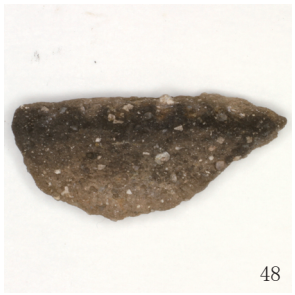

47


41

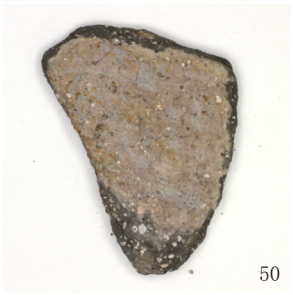

42


45


46


48


49


50


51

写真 99　出土遺物（土器）④


53-1


53-2

写真 100　出土遺物（石器）①



写真 101　出土遺物（石器)②

SD3(図22の46・47、写真99)

46・47とも埋土下層であるL3出土。**46**は弥生土器甕の体部片。4条の沈線が残り、外面には煤が多量に付着している。47は土製蓋の裾部片。天井部は欠失しているが、大きく外反しながら端部に至る。端部内面には黒色の炭化物もしくは煤が付着する。外面は縦ハケ、内面は横方向のヘラミガキが施される。復元裾部径20.2cm、残高4.8cmを測る。

SD4(図22の48、写真99)

48は埋土上層であるL1出土。弥生土器甕口縁部の小片で、口縁外端には刻目が施されている。

遺構面基盤層(図22の49・50、写真99)

明黄色または緑灰色シルト層からの出土である。**49・50**ともに縄文土器深鉢の小片と見られ、49の外面には条痕が残る。

旧耕土(図22の51、写真99)

51は古代の須恵器坏口縁部片。口縁は大きく外方に開き、端部は丸く収めている。

【石器】

NR1(図23・24・25の55、写真100・101)

52・53は埋土L3出土の砥石。52は片面に比熱痕が残る。ともに石英斑岩製。54・55は最下層である埋土L5出土。**54**は河底より自然木とともに出土した(図13中央)。敲石の可能性があるが、風化により表面が剥離し、明確な使用痕が見られない。花崗閃緑岩製。**55**は磨製石斧の半損品と見られる。刃部は

表5 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	遺物包含層	弥生土器 甕	口縁部	③4.4	①灰白色(2.5Y8/2) ②灰白色(10YR8/2)	やや粗:1～7mmの石英・長石をやや多く含む	
2	遺物包含層	弥生土器 壺/甕	底部	②(8.0)③1.9	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや粗:0.5～1mmの石英・長石を多量に含む	
3	遺物包含層	弥生土器 壺/甕	底部	③2.9	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密:1～4mmの石英・長石をやや多く含む	
4	遺物包含層	弥生土器 高坏	脚部	③5.8	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	粗:0.5～5mmの石英・長石を多量に含む	
5	遺物包含層	須恵器 壺	底部	②(10.4)③6.4	①灰色(7.5Y6/1) ②灰白色(7.5Y7/1)	やや粗:0.5～1.5mmの石英・長石を少量含む	
6	遺物包含層	土師器 甕	口縁部～胴部	①(14.7)③10.8	①灰白色(10YR8/2)・灰黄褐色(10YR6/2) ②黄灰色(2.5YR7/2)	密:0.5～4mmの石英・長石をやや多く含む	
7	遺物包含層	土師器 皿	口縁部～底部	①(16.0)②(5.0) ③2.5	①②明赤褐色(5YR5/6)・にぶい黄橙色(10YR6/4)	密:0.5～4mmの石英・長石をやや多く含む	
8	遺物包含層	須恵器 坏蓋	口縁部	③1.0	①灰白色(N8/) ②灰白色(N8/)	精緻:砂粒含まない	
9	遺物包含層	須恵器 坏	口縁部	③3.4	①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	精緻:0.5～1㎜の石英・長石を少量含む	
10	遺物包含層	須恵器 高台付坏	底部	②(8.0)③2.3	①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密:0.5mmの石英・長石を少量含む	
11	遺物包含層	須恵器 高坏	裾部	③1.3	①灰色(7.5Y6/1) ②灰黄色(2.5Y6/2)	やや粗:0.5mmの石英・長石を少量含む	
12	遺物包含層	瓦質土器 足鍋	口縁部	③3.9	①灰白色(N7/) ②灰白色(5Y7/2)	密:1～2mmの石英を少量含む	
13	NR1 L2	弥生土器 甕	口縁部	③1.8	①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	やや粗:0.5～1mmの石英・長石を多量に含む	
14	NR1 L2	弥生時代 壺	肩部	③1.7	①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	密:0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
15	NR1 L2	弥生土器 壺	肩部	③3.7	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや粗:0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
16	NR1 L2	弥生土器 壺	肩部	③3.1	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	密:0.5～2mmの石英・長石を多量、赤色土粒を少量含む	
17	NR1 L3	弥生土器 壺/甕	底部	②8.0③2.6	①褐灰色(5YR5/1) ②灰白色(2.5Y8/1)	密:0.5～2mmの石英・長石を多量に含む	
18	NR1 L3	土師器 甕	口縁部	③3.4	①黒色(10YR2/1) ②灰黄褐色(10YR6/2)	密:0.5～1mmの石英・長石を少量含む	
19	NR1 L3	土師器 甕	口縁部～底部	②5.0③23.4	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②灰黄褐色(10YR6/2)	密:0.5～1mmの石英・長石を多量に含む	
20	NR1 L4	縄文土器 深鉢	口縁部	③2.1	①黒色(2.5Y2/1) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	やや粗:0.5～1.5mmの石英・長石をやや多く含む	
21	NR1 L4	弥生土器 甕	口縁部	③2.2	①にぶい褐色(7.5YR6/3)・黒褐色(7.5YR3/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや粗:0.5～1.5mmの石英・長石をやや多く含む	
22	NR1 L4	弥生時代 甕	胴部	③5.0	①灰黄褐色(10YR4/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	粗:0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
23	NR1 L4	弥生土器 壺	口縁部	③3.1	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	密:0.5～1mmの石英・長石を少量含む	
24	NR1 L4	弥生土器 壺	肩部	③4.1	①灰黄褐色(10YR6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	粗:0.5～1mmの石英・長石をやや多く含む	
25	NR1 L4	弥生土器 壺	肩部	③1.9	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②褐灰色(10YR4/1)	密:0.5～1mmの石英・長石をやや多く含む	
26	NR1 L5	弥生土器 壺	口縁部	①(14.0)③2.2	①灰黄褐色(10YR5/2) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	密:0.5～1.5mmの石英・長石を少量含む	
27	NR1 L5	弥生土器 壺	底部	②8.0③7.2	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②浅黄色(2.5Y7/3)	密:0.5～1.5mmの石英・長石をやや多く含む	
28	NR1 L5	弥生土器 壺	底部	②(8.6)③1.9	①灰白色(10YR7/1) ②灰白色(2.5Y8/1)	やや粗:0.5～2.5mmの石英・長石・角閃石をやや多く含む	
29	NR1 L5	弥生土器 壺	胴部	③7.9	①灰黄褐色(10YR6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	粗:0.5～1.5mmの石英・長石を少量に含む	
30	NR1 L5	弥生土器 壺	肩部	③4.5	①暗赤灰色(2.3YR3/1) ②灰黄褐色(10YR5/2)	やや粗:0.5～4mmの石英・長石をやや多く含む	
31	NR1 L5	弥生土器 壺	肩部	③3.4	①灰黄褐色(10YR5/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	密:0.5～1mmの石英・長石を少量含む	
32	NR1 L5	弥生土器 壺	肩部	③3.1	①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	やや粗:0.5～1mmの石英・長石少量含む	

遺物番号	遺構層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
33	NR1 L5	弥生土器　壺	胴部	③3.2	①褐色(7.5YR4/3) ②灰褐色(7.5YR4/2)	やや粗:0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
33	NR1 L5	弥生土器　壺	胴部	③3.2	①褐色(7.5YR4/3) ②灰褐色(7.5YR4/2)	やや粗:0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
34	NR1 L5	弥生土器　壺	肩部	③3.4	①褐灰色(7.5YR5/1) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	やや粗:0.5～1mmの石英・長石を少量含む	木葉文
35	NR1 アゼ中	弥生土器　壺	肩部	③2.5	①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	粗:0.5～1mmの石英・長石をやや多く、赤色土粒を少量含む	
36	NR1 アゼ中	弥生土器　壺	胴部	③4.1	①灰黄褐色(10YR5/2) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	密:0.5～1.5mmの石英・長石を少量含む	
37	NR1 アゼ中 L1～2	弥生土器　壺/甕	底部	②8.2③2.9	①浅黄色(2.5Y7/4)灰白色(2.5Y8/2) ②灰白色(2.5Y7/1)	密:0.5～2mmの石英・長石を多量に含む	
38	SD1a L2	近世陶器　甕	胴部	③3.7	①灰白色(10YR8/2) ②灰白色(10YR8/1)	密:1～1.5mmの石英・長石を少量含む	
39	SD2 L1	弥生土器　甕	胴部～底部	②(6.8)③15.7	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②灰黄褐色(10YR5/2)	密:0.5～4mmの石英・長石を多量に含む	
40	SD2 L1	弥生土器　甕	口縁部～胴部	①(19.6)③20.7	①明褐灰色(7.5YR7/2) ②灰黄褐色(10YR6/2)	やや密:1～3mmの石英・長石をやや多く含む	
41	SD2 L1	弥生土器　甕	底部	②4.8③4.2	①にぶい褐色(7.5YR5/3)・にぶい橙色(5YR7/4) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密:0.5～3mmの石英・長石を少量含む	
42	SD2 L1	土師器　甕	口縁部	①(16.0)③2.1	①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや粗:0.5～1mmの石英・長石・赤色土粒をやや多く含む	
43	SD2 L2	土師器　甕	口縁部～底部	①(10.8)②(4.4) ③15.7	①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや粗:0.5～1mmの石英・長石、1～2㎜の赤色土粒をやや多く含む	
44	SD2 L3	弥生土器　壺	口縁部～肩部	①(11.4)③6.0	①明赤褐色(2.5YR5/6)②にぶい赤褐色(2.5YR5/4)・にぶい褐色(7.5YR5/3)	やや粗:0.5～1mmの石英・長石を少量含む	
45	SD2 アゼ中	弥生土器　鉢	口縁部	③6.1	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	密:0.5～2mmの石英・長石をやや多く含む	
46	SD3 L3	弥生土器　甕	胴部	③6.5	①褐灰色(7.5YR5/2) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	やや粗:0.5～1.5mmの石英・長石をやや多く含む	
47	SD3 L3	弥生土器　蓋	口縁部	①(20.2)③4.8	①②にぶい黄橙色(10YR6/3)・灰黄褐色(10YR4/2)	粗:0.5～2mmの石英・長石を少量含む	
48	SD4 L1	弥生土器　甕	口縁部	③1.6	①にぶい黄褐色(10YR5/3)・黒色(10YR2/1) ②にぶい褐色(7.5YR5/3)	やや粗:0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
49	遺構面基盤層	縄文土器　鉢か	胴部	③3.2	①灰黄褐色(10YR6/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	密:0.5～1mmの石英・長石を多量に含む	
50	遺構面基盤層	縄文土器　浅鉢か	肩部	③3.2	①灰黄褐色(10YR6/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや粗:0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
51	旧耕土	須恵器　坏	口縁部	③2.2	①灰色(N6/) ②灰色(N6/)	密:0.5mmの石英・長石を少量含む	

表6 出土遺物(石器)観察表

法量( )は残存値

遺物番号	遺構層位	器種	法量(cm) ①長さ②幅③厚④重量(g)	石材	備考
52	NR1　L3	砥石	①(6.7)　②(8.6)　③1.5　④(136.06)	石英斑岩	
53	NR1　L3	砥石	①18.2　②(11.6)　③5.6　④(1806.9)	石英斑岩	
54	NR1　L5	不明石器	①14.8　②13.8　③12.0　④3450	花崗閃緑岩	
55	NR1　L5	太型蛤刃石斧	①(13.4)　②5.1　③1.5　④(200.21)	緑色片岩	
56	SD3	石包丁	①(3.9)　②(3.9)　③(0.6)　④(12.42)	片岩か	
57	SD4	剥片	①4.5　②2.5　③0.8　④8.21	黒曜石	姫島産

欠損している。残長13.4㎝、最大幅5.1㎝を測る。緑色片岩製。

SD3(図25の56、写真101)

56は石包丁の破損品と見られる。刃部は両刃で、背は欠失している。残長・幅とも3.9㎝、最大厚0.6㎝を測る。片岩製か。

SD4(図25の57、写真101)

57は姫島産黒曜石の剥片。最大長4.5㎝、最大幅2.5㎝、最大厚0.8㎝を測り、重量8.21gを量る。

(6)小結(図26)

当調査では、弥生時代前期から古墳時代前期にかけて機能した自然河川と、潅漑用と見られる複数の溝などを確認した。各遺構の性格についてはすでに記した通りであるが、性格不明土壙状遺構(SX1～4)の機能については今後の更なる検討が必要である。

NR1とSD2・3の埋没時期は古墳時代前期で、これは調査区の南東150mに営まれた弥生時代から古墳時代にかけての集落(遺跡保存公園や現国際総合科学部校舎周域)の廃絶時期と一致する。検出された河川と溝の利用者がこの集落の人々であったことは間違いなく、人が去ったことで河川も放置され、埋没したと理解される。今回の発見により、弥生時代の農耕地が調査区の西南方向、陸上競技場に展開する可能性が極めて高くなったが、最後に第2体育館新営に伴う発掘調査にて検出された遺構[註1]との関係を確認しておく。

第2体育館大溝1は北－南西方向に走っており、弥生時代後期中に埋没したとされる。筆者は大溝1は自然河川で、これが大きく方向を西に向けNR1に繋がると推定している。

第2体育館大溝2は北東－南西方向に走っており、大溝1に後出するもので、弥生時代後期が上限とされる。溝の規模や形状、出土遺物の所属時期からこれがSD2に繋がるとして間違いない。そうすると、SD2はSD3を切り込んで形成されたことになる。大溝2の埋没は試掘調査で出土した須恵器を根拠に古代以降と推測されているが、本発掘調査では弥生土器しか出土していない。筆者は、SD2埋土上層の遺物から、この溝の埋没も古墳時代前期と考えている。

また、第2体育館大溝2と大溝3との接続部に設けられた大溝3下層土坑状遺構にも注意が必要である。同様の遺構がNR1とSD3との接続部に見られる(SX4)。吉田遺跡に近隣する小路遺跡においても、自然河川に取り付く弥生時代の溝に、不明確ながら土壙状の落ち込みが見られる[註2]ことから、弥生時代の河川や用水路の接続・分岐等の際に設けられる通有施設であった可能性も指摘できる。

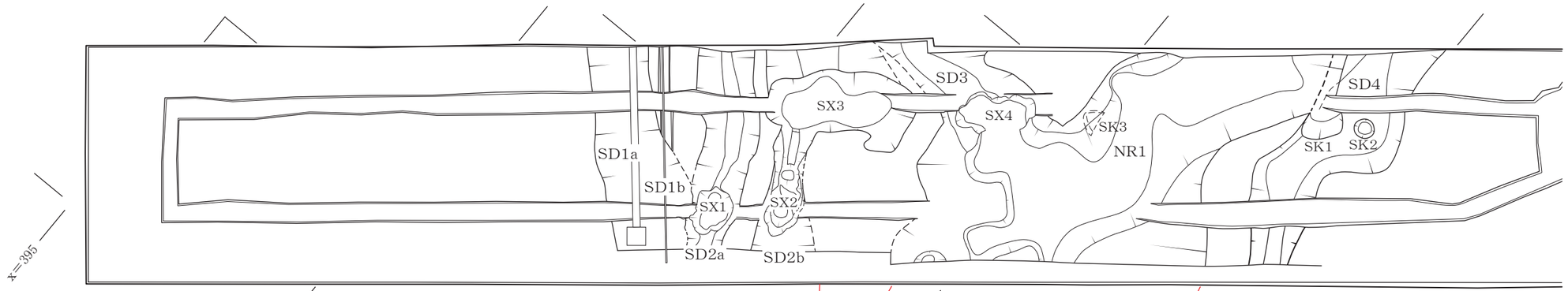
第2体育館小溝7は大溝1に先行することから、SD4には繋がらない。小溝5または小溝9の延長部がSD4であろう。

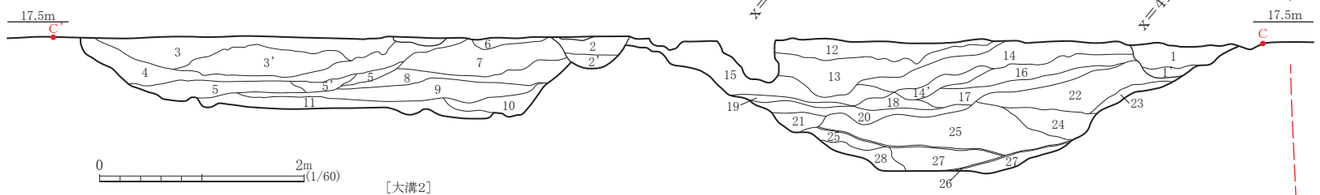
当調査においては、先史時代の水利に関する貴重な資料を得ることができた。一方で、開発の掘削深度が現地表下1.5mであったこと、設計変更が困難な建屋であったことから、記録保存の名の下に遺構を全破壊させたことも事実である。本学としてこれを重く受け止め、今後万全な埋蔵文化財保護対応を目指していきたい。

【註】

1)村田裕一・中村仁美(2000)「吉田構内第2屋内運動場新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅣ』,山口

2)縄田潔・管波正人(1988)『小路遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第27集,山口市教育委員会社会教育課文化財センター(編),山口





［小溝3］
1 黒褐色粘質土（黄色砂礫混）
1’黒褐色粘質土

［小溝4］
2 黒褐色粘質土
2’黒褐色粘質土（砂礫混）

［大溝2］
3 黒褐色粘質土（小礫混）…上層
3’黒茶褐色粘質土（小礫やや多い）…上層
4 暗灰褐色粘質土（小礫を含まない）…上層
5 暗灰褐色砂質土…上層
5’黒褐色粘質土…上層
6 暗灰褐色粘質土…下層
7 黒茶褐色粘質土（小礫混）…下層
8 暗灰茶色砂…下層
9 灰黄色砂礫…下層
10 黒灰色粘質砂…下層
11 黒灰色砂礫…下層

［大溝1］
12 黒褐灰色粘質土（砂礫混）…上層上部
13 黒褐色粘質土（小礫混）…上層上部
14 黒灰色砂礫土（黄色礫多量混）…上層下部
14’黒灰色砂礫土…上層下部
15 黒褐色粘質土（淡黄色礫混）…上層下部
16 暗褐色砂礫土…上層下部
17 明黄灰色粘質砂…上層下部
18 黒灰色粘質砂…上層下部
19 暗灰色礫…上層下部
20 黒灰色粘質砂…上層下部
21 暗灰色粘土及び砂…上層下部
22 黄灰色シルト…下層
23 暗黄灰色粘質土…下層
24 暗灰黄色シルト…下層
25 灰色砂礫…下層
26 黒褐色炭化物層…下層
27 灰色砂…下層
28 暗灰色粘土…下層



［暗渠］
1 攪乱土

［小溝3］
2 黒褐色粘質土

［小溝4］
3 黒茶褐色粘質土

［大溝2］
4 暗灰褐色砂質土…上層
5 黒褐色粘質土…上層
6 暗灰・茶灰色砂質土互層…下層
7 黒灰・茶灰色砂礫互層…下層

［大溝1］
8 黒褐色粘質土…上層上部
9 暗灰黄褐色粘質土…上層下部
10 暗灰褐色砂質土…上層下部
10’暗灰黄褐色粘質土（黄・白色砂礫混）…下層
11 暗灰褐色砂礫…下層
12 黒灰色粘質土…下層
13 灰黄茶色粗砂…下層



写真 102　第2体育館新営に伴う発掘調査区全景（東から）

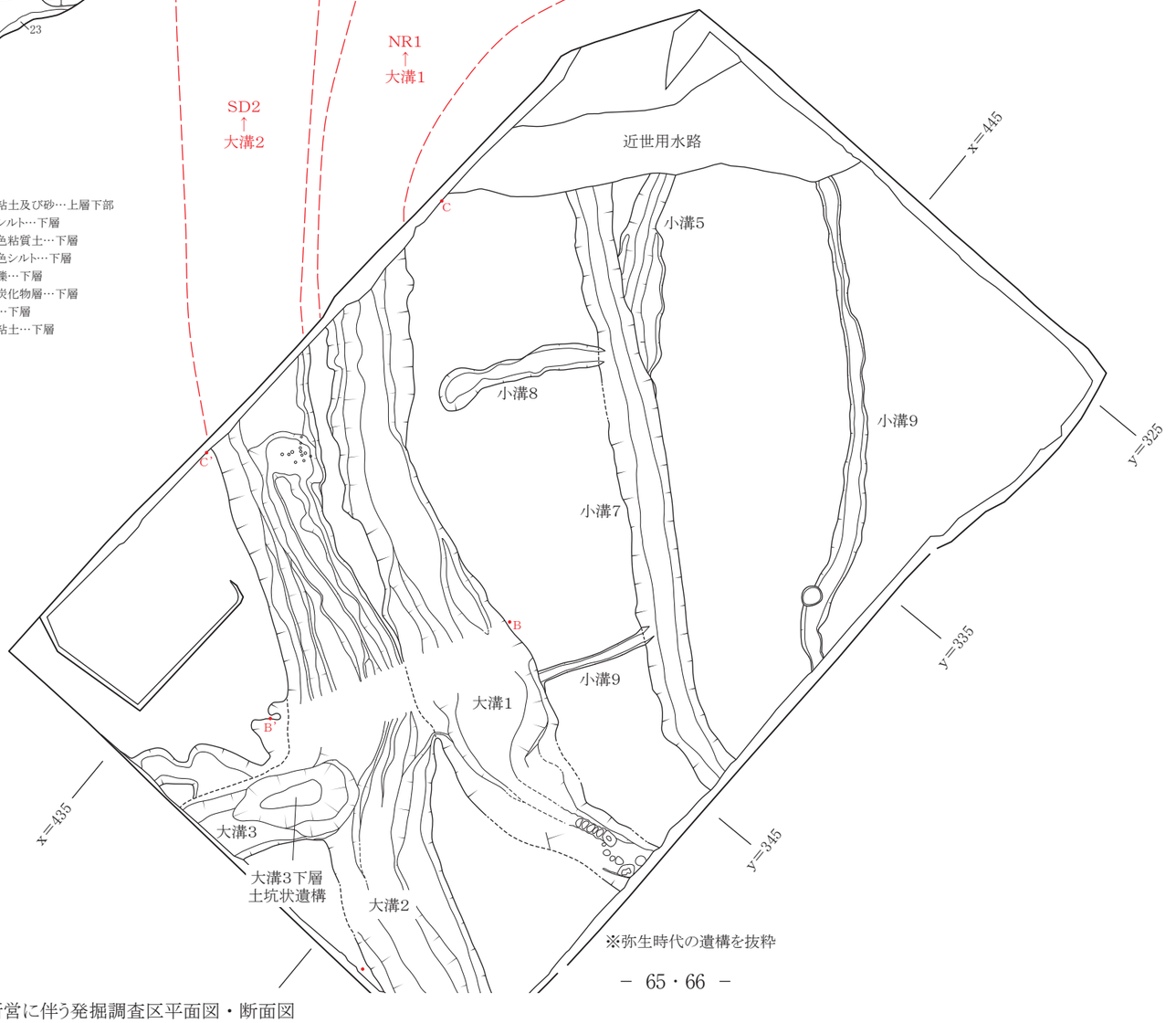


図 26　第2体育館新営に伴う発掘調査区平面図・断面図

3．第1武道場耐震改修その他工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内H-15区

調査面積　1.5㎡

調査期間　平成26年1月30日

調査担当　横山成己

調査結果

第1武道場耐震改修その他工事（体育器具庫更新工事）に伴う本発掘調査が平成25年12月27日に終了したことを受け、翌年1月より第1体育館および第1武道場周囲の設備関連工事が急ピッチで進められることとなった。

吉田構内第1体育館は本学吉田地区統合移転最初期である昭和41年（1966）竣工、第1武道場は昭和44年（1970）竣工であるため埋蔵文化財保護を目的とする発掘調査が実施されておらず、長らく周囲の地下の状況が不明確であったものの、平成元年度（1989）に実施した立会調査[註1]により、第1武道場周囲の造成土の厚みがある程度判明している。設備関連工事は、ほぼ全ての掘削が造成土内に止まることが予想されたが、掘削深度の深い集水枡設置地点1箇所については造成土の厚みを越える掘削となる可能性が生じたため、立会調査を実施する運びとなった。

調査地は、第1体育館西側の集水枡設置地点である（図27）。掘削は現地表下90㎝に及んだが、造成土内に止まった（図28、写真103）。

本書にて報告した、第2体育館および体育器具庫敷地に流入する自然河川や溝は、第1体育館と第1武道場敷地にその上流が求められる。既設建物の建設工事により、これらの遺構は消滅した可能性が高いが、弥生時代の農耕地を含む集落構造を復元する上で重要な地域であることに変わりはない。小規模工事の場合においても、丁寧な埋蔵文化財保護対応が必要である。

【註】

1）河村吉行（1991）「第二武道場排水溝新営に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』,山口



図 27　調査区位置図



写真 103　調査区東壁土層断面（西から）

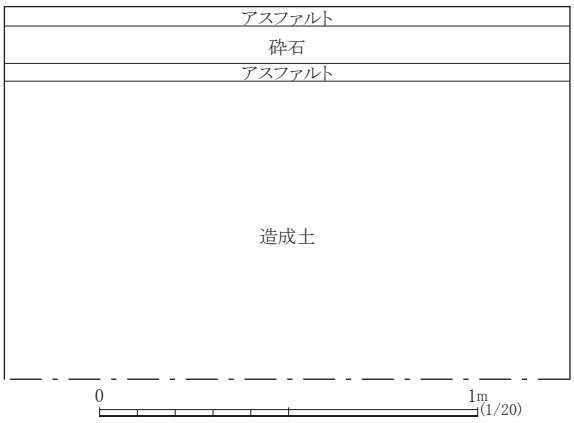


図 28　土層断面柱状図

4. 農場本館研究・実験室改修工事に伴う立会調査



図 29　調査区位置図

調査地区　吉田構内S-13区

調査面積　6㎡

調査期間　平成26年2月5日

調査担当　横山成己

調査結果

農学部付属農場本館建物は、昭和42年（1967）に竣工しているが、昭和41年（1966）に小野忠熙氏により実施された吉田遺跡第Ⅳ地区牛舎新営に伴う発掘調査で10月に撮影されたと思われる写真に、建設中の農場本館建物が映り込んでいる。小野氏により埋蔵文化財保護対応が図られた記録が残っていないため、未調査で工事は進められたようであり、建物地下の様相は不明となっている。今回の工事計画では、本館建物北側に新たに検水枡と管路が設けられる事となったため（図29）、工事立会を実施することとなった。

工事では、現地表下60㎝まで掘削が行われたが、現地表より下3㎝がアスファルト、20㎝までが砕石、60㎝までが造成土であった（図30、写真104）。

農場本館建物は、東に近接する丘陵傾斜地を削平して建設された可能性が高い。既往の立会調査では、造成土直下に岩盤風化層が露出する事から、削平深度は相当に深く、建物周囲に遺構が遺存する可能性は極めて低いと推定される。

その一方で、牛舎新営に伴う発掘調査では、複数の竪穴住居跡や溝、ピット等が確認されており[註1]、削平深度が浅かった場所には、埋蔵文化財が遺存する可能性が残されている。今後も周辺地域での地下の掘削を伴う工事計画に対しては、慎重な埋蔵文化財保護対応が必要となる。



写真 104　調査区東壁土層断面（北西から）

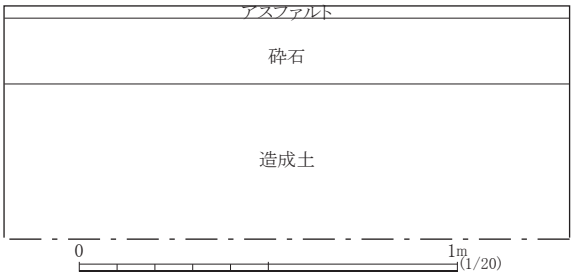


図 30　土層断面柱状図

【註】

1）山口大学吉田遺跡調査団（1976）『山口大学構内　吉田遺跡発掘調査概報』,小野忠熙（編）,山口

5. 農学部本館他電気接地改修工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内R・S-13区

調査面積　10㎡

調査期間　平成26年3月11日

調査担当　横山成己

調査結果

吉田構内8箇所（大学会館・共通教育本館棟・メディア基盤センター・経済学部C棟・人文学部研究棟・理学部2号館・実験動物施設・農場本館）において、電気接地改修工事が計画された。このうち7箇所については、建物内または建物近接地であることから埋蔵文化財保護対応は不要であったが、農場本館では建物の西側に離れた地点にて新たに配線が設けられることとなったため、工事立会を実施する運びとなった（図31）。

配線部は総延長20mの距離で深度45㎝の掘削が行われたが、全域が造成土内に止まった（図32、写真105）。また、配線南端部の接地極埋設部分については75㎝の掘削が行われたが、地山は確認されなかった。

農学部附属農場本館西隣と南方80mの位置には実験水田が設けられており、耕作土から古代を中心とする遺物が多数採取されている[註1]。このことから、農場本館周域に古代の集落が形成されていたと推定されるものの、未だ明確な遺構を検出するに至っていない。吉田構内南東端部（動物医療センター周域）に確認される古代官衙との関連を考察する上でも重要な地域であることから、小規模工事であっても継続的に調査を実施していく所存である。

【註】

1）田畑直彦（2004）「吉田構内農学部附属農場の分布調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口



図 31　調査区位置図



写真 105　調査区南端部（南から）

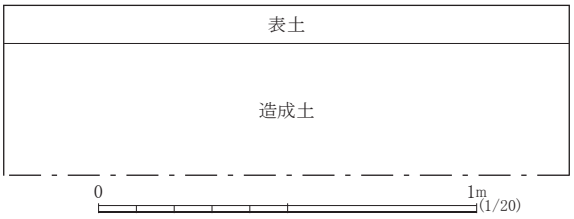


図 32　土層断面柱状図

6．椹野寮新営工事に伴う立会調査

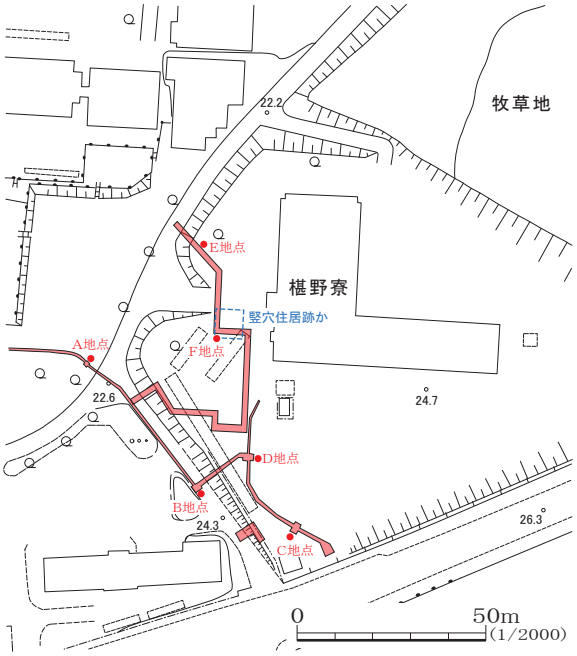


図 33　調査区位置図



写真 106　A地点北東壁土層断面（南西から）



写真 107　B地点南東壁土層断面（北西から）

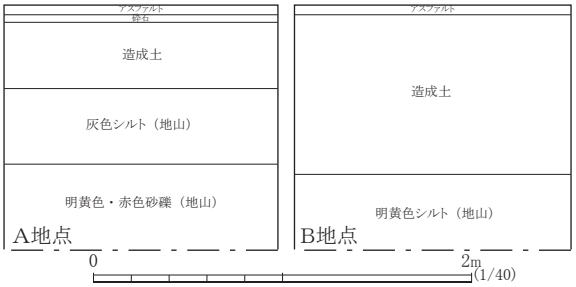


図 34　A･B地点土層断面柱状図

調査地区　吉田構内O－20区、N･O－21区
O･P-22区

調査面積　35㎡

調査期間　平成25年8月28日、9月2･12日
11月14日、12月24日、平成26年2月19･21･24･26～28日

調査担当　横山成己

調査結果

平成24年度、吉田構内南東部丘陵地において椹野寮（女子寮2号棟）新営に伴う発掘調査を実施した。その結果、建設予定地は棚田構築のため大きく削平を受けていることが判明したが[註1]、北に隣接する既設の女子寮1号棟は昭和41年（1966）に埋蔵文化財調査が実施されることなく建設されたため、女子寮敷地全体の地下の様相は不明確となっていた。平成25年度に至り、機械設備工事等が実施される際に、女子寮敷地西－南西地点において掘削深度の深い管埋設工事が計画されたため、工事立会を実施する運びとなった（図33）。

A･B地点は、女子寮が立地する丘陵縁辺部を大学造成時にカットしたと推測される地点である。A地点では現地表下1mに灰色シルトの地山が、B地点では現地表下0.9mに明黄色シルトの地山が検出されている（図34、写真106･107）。

C地点は女子寮敷地南端部で、現地表下0.8mにて旧耕土が検出され、その下位の青灰色シルトの地山を検出面として、溝状遺構が確認された（図35、写真108）。埋土の土質から見て、平成24年度調査でも検出された水田区画に伴う溝と見られる。

D地点では、現地表下0.9mに旧耕土が検出され、その下位の灰黄色シルトの地山を切り込む褐色砂礫層を確認した（図35、写真109）。遺物が確認されなかったため形成時期は不明であるが、自然河川と推測される。

E地点は女子寮敷地北西端部に当たる。現地表下1.7mに旧耕土および旧床土を検出し、現地表下1.86mで明黄色シルトの地山を検出面とするピット

を確認した（図35、写真110）。ピットは幅約50㎝、深さ7㎝で、埋土は灰色粘質土である。

F地点は女子寮1号棟西側管路で、現地表下1.4mに旧耕土および旧床土（合わせて層厚30㎝）、下位に層厚10㎝の褐灰色弱粘質土層（古代の須恵器が混ざる遺物包含層）、地山である明黄色シルトを検出した。地山を掘り込む形で大型の遺構を確認したが（図35、写真111）、工事掘削深度が深く、管路の幅も狭小であったため、安全上調査に時間をかけることができなかった。

以上の調査成果から、椹野寮敷地西部には遺構が埋存している可能性が高く、注意が必要である。

【註】

1）横山成己（2016）「椹野寮新営工事に伴う予備発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』,山口

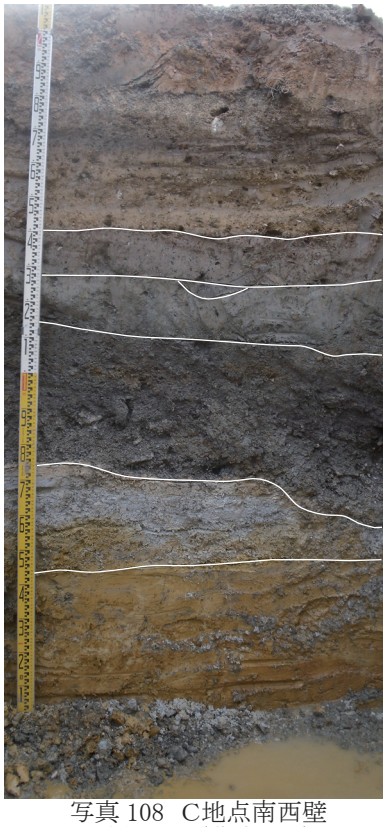


写真 108　C地点南西壁土層断面（北東から）

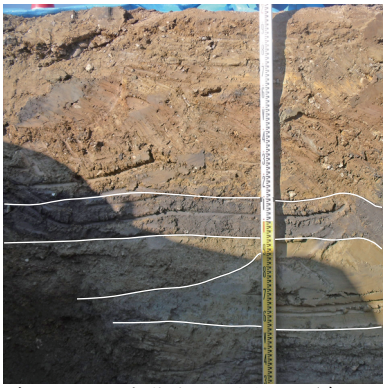


写真 109　D地点北東壁土層断面（南西から）

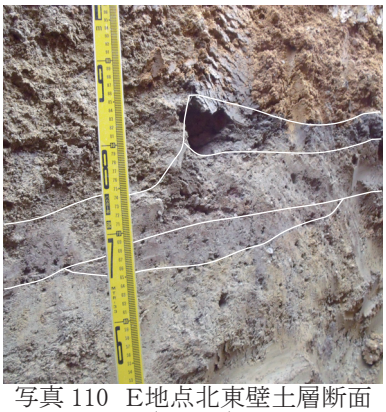


写真 110　E地点北東壁土層断面（西から）



写真 111　F地点南壁土層断面（北から）

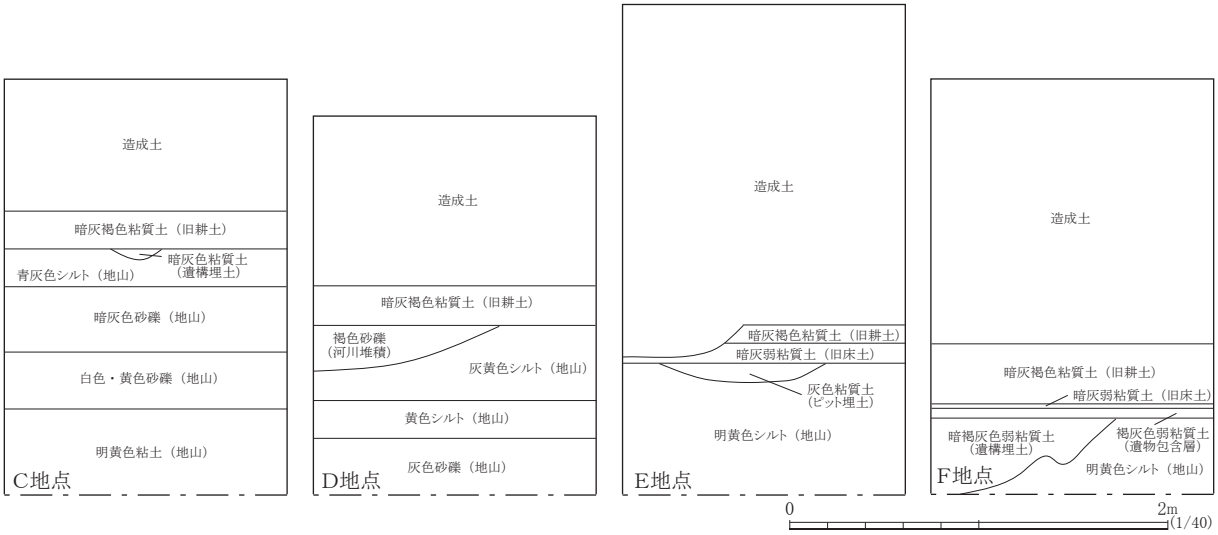


図 35　C～F地点土層断面柱状図

7. 陸上競技場外灯設置工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内E－20、F－19、G－18・19、H－18区

調査面積　56㎡

調査担当　横山成己

調査期間　平成25年11月26日

調査結果　吉田構内西部の陸上競技場とラグビー場の間には、遊歩道が存在する。この遊歩道は主に教育学部教職員が附属特別支援学校に行来する際、または附属特別支援学校教員および生徒が大学構内を訪問する際に使用されているが、これまで照明が存在しなかったことから、安全面に問題がある歩道であった。平成25年度後期にいたり、急遽外灯の設置工事が計画された（図37）。



写真 112　工事掘削風景（北東から）

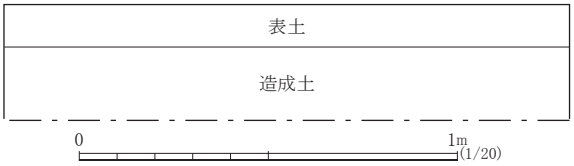


図 36　土層断面柱状図

工事は、遊歩道の南東側を総延長175m、深さ0.3mの規模で掘削する計画であった。当遊歩道敷地では、平成7年度に基幹環境整備（ATMネットワークケーブル布設）に伴う立会調査が実施されているものの、正式な調査報告を刊行していないこともあり、慎重を期して工事立会を実施した。

調査の結果、全域で現地表下約10㎝が表土、以下約20㎝が造成土であることが確認され、遺物包含層や地山は検出されなかった（図36、写真112）。

主に運動場として用いられている吉田構内西部は沖積平地であり、遺跡保存公園から国際総合科学部・教育学部校舎の立地する微高地に弥生時代から古墳時代にかけての集落が、陸上競技場のある低地には自然河川および用水路が確認されている。今後とも慎重な埋蔵文化財保護対応が必要と言える。

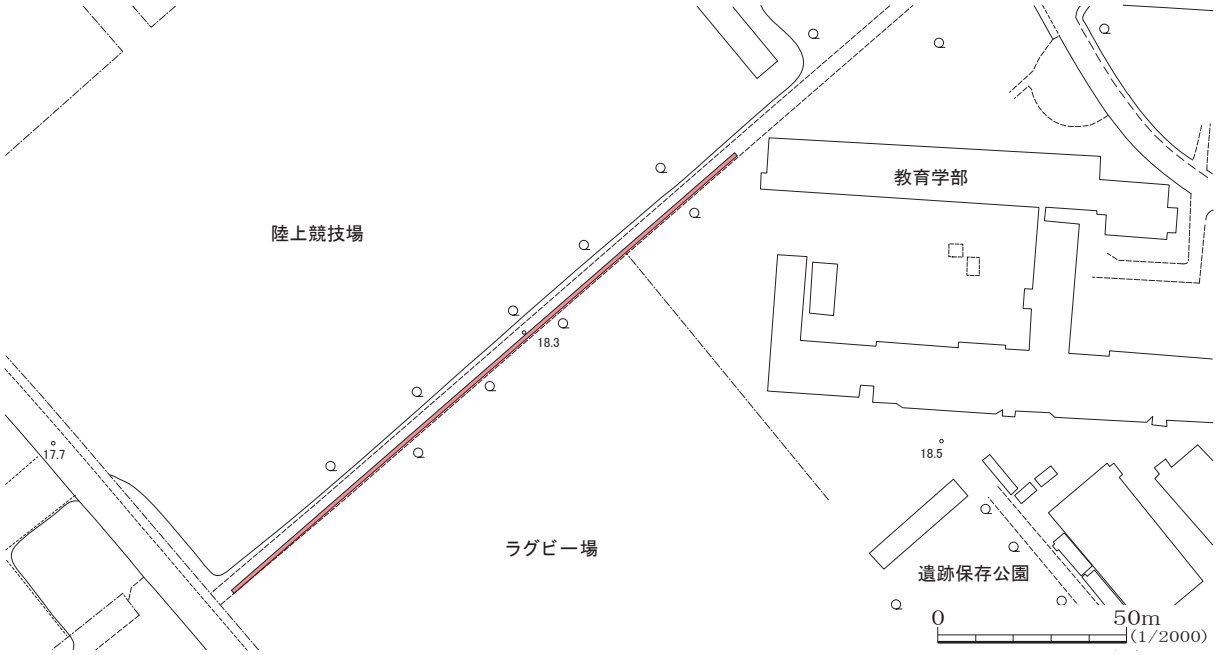


図 37　調査区位置図

8．自転車置き場設置工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内G・H-15区

調査面積　90㎡

調査期間　平成26年2月7日

調査担当　横山成己

調査結果

第1武道場耐震改修その他工事が実施されることに伴い、第2武道場南側に自転車置き場が新設されることとなった（図38）。第2武道場は昭和48年（1973）に竣工しており、埋蔵文化財調査が未実施であったため、建物周辺の地下の様相は不明瞭であったが、平成15年度に武道場の東隣接地にて実施された基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査において、現地表下約1.3mの深度で河川堆積土と推察されるシルトおよび粗砂層が確認されていることから[註1]、当工事においても立会調査を実施する運びとなった。

計画された自転車置き場はベタ基礎であったことから、部分的に深掘りされる箇所を対象に調査を行った。降雨中の調査となり、調査区の壁面精査は困難であったが、調査区西端部において①現地表下60㎝の造成土、②層厚15㎝旧耕土、③層厚50㎝の暗灰黄色シルト（地山）、④層厚15㎝以上の褐色シルト（地山）を確認した（図39、写真113）。

③④層は当年度に実施した第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査において確認された地山と類似していることから、第2武道場周域にも弥生時代から古墳時代前期にかけての河川や用水路が存在した可能性を否定できない。吉田構内では開発工事等が比較的少ない地域ではあるが、今後とも地下の情報収集に努めたい。

【註】

1）田畑直彦（2005）「基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』,山口

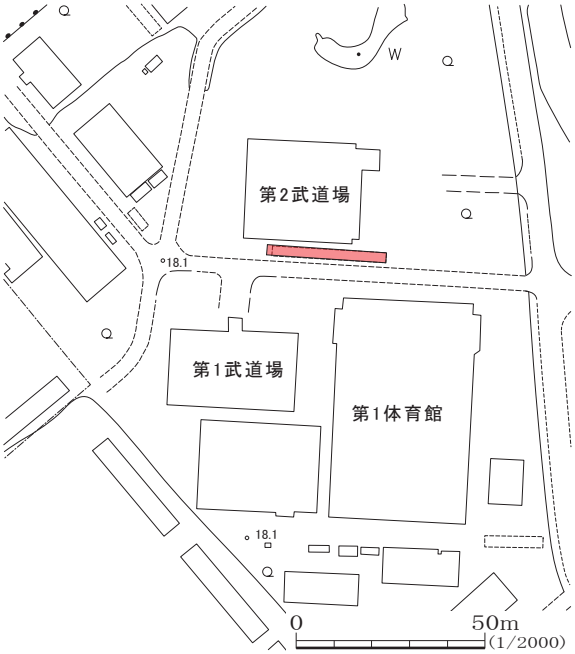


図 38　調査区位置図



写真 113　調査区西壁土層断面（東から）

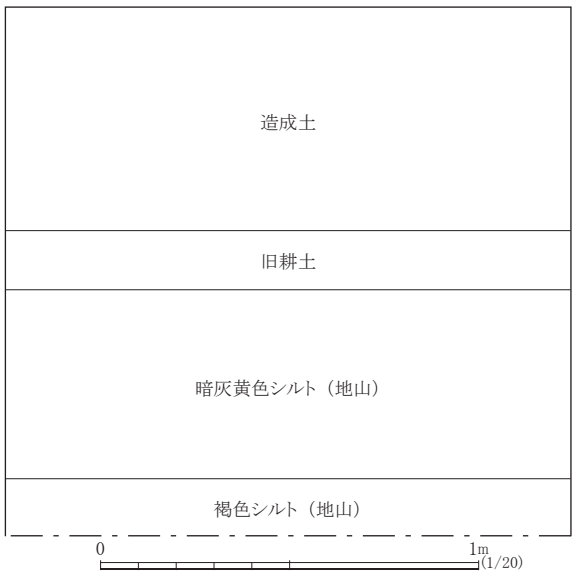


図 39　土層断面柱状図

9．基幹・環境整備（太陽光発電設備）に伴う立会調査



図 40　調査区位置図

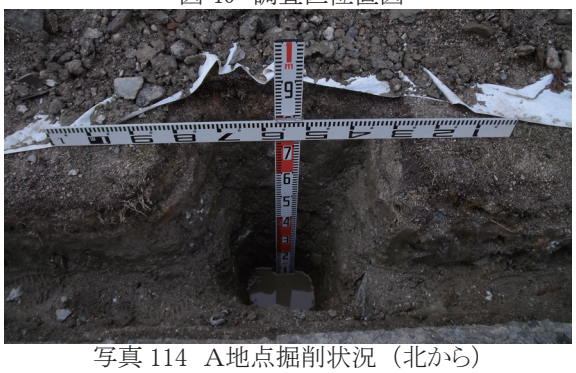


写真 114　A地点掘削状況（北から）



写真 115　B地点掘削状況（南西から）

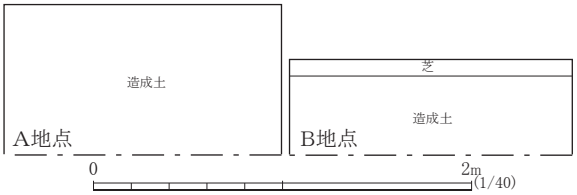


図 41　A・B地点土層断面柱状図

調査地区　吉田構内L・M－18、L－18

調査面積　10㎡

調査期間　平成26年2月19日

調査担当　横山成己

調査結果

吉田構内9箇所において、太陽光発電設備工事が計画された。このうち、理学部1号館、理学部3号館、人文・理学部管理棟、共用棟A、教育学部C棟、農学部・共同獣医学部本館、大学会館は建物の余掘り内または既設管沿いに計画されたため、埋蔵文化財に支障が生じるものではなかったが、総合図書館2号館、経済学部A棟の2箇所については、土地の新規掘削となる可能性が高いことから、立会調査を実施する運びとなった（図40）。

総合図書館2号館北側構内巡回道路沿い調査区（A地点）では、最深で80㎝の掘削が行われたが、造成土内にとどまった。経済学部A棟南側中庭調査区（B地点）では、最深で50㎝の掘削が行われたが、こちらも造成土内にとどまった（図40・41、写真114・115）。

両者のうち、総合図書館北部は遺跡保存地区に南面しており、既往の調査により多量の埋蔵文化財が包蔵されていることが判明している[註1～3]。当工事では埋蔵文化財に支障は生じなかったが、今後とも慎重な対応が求められる。

【註】

1）豆谷和之（1993）「吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅠ』，山口

2）田畑直彦（2016）「吉田遺跡第Ⅰ地区A区の未報告図面について」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅩⅠ』，山口

3）横山成己（2016）「図書館改修工事及び環境整備（図書館周辺道路迂回）工事に伴う本発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』，山口

10. 交通標識設置工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内J－15、L-11・12・13、M－11、O－18区

調査面積　6㎡

調査期間　平成26年3月24日

調査担当　横山成己

調査結果

吉田構内6箇所に、交通標識を設置する工事が計画された（図42）。掘削規模はいずれも平面1m×1m、深さ0.6mと狭小であったが、平成20年度に本部2号館北側駐車場敷地にて現地表下0.6～0.8mで遺構面が確認されており、山口大学就職支援施設（O－HARA）西方の社会・国際連携ゾーンにて、現地表下0.25～0.6mで遺構面が確認されている[註1]ことから、慎重を期し立会調査を実施したが、掘削は何れも造成土内にとどまった（図43、写真116）。

【註】

1）田畑直彦（2012）「新教育棟設備関連工事に伴う本発掘調査」，横山成己（2012）「正門導線改善工事に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』，山口



写真 116　B地区東壁土層断面（南西から）



図 42　調査区位置図

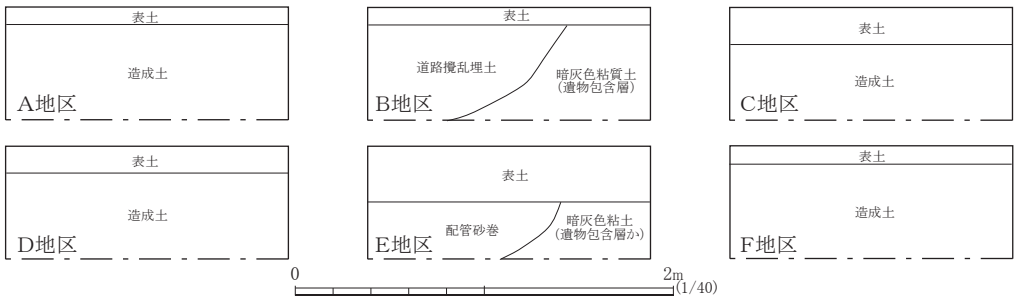


図 43　A～F地区土層断面柱状図

5．学術情報資産の集約管理システム設備工事に伴う立会調査



図 44　調査区位置図



写真 117　調査区全景（南西から）



写真 118　調査区土層断面（南から）

調査地区　吉田構内K-14区

調査面積　約22.8㎡

調査期間　平成25年12月24日

調査担当　田畑直彦

調査結果

吉田構内の車庫北側において、学術情報資産の集約管理システム設備工事に伴い発電機を設置することになり、平面形7.6m×3mの範囲を現地表下40cmまで掘削する工事が計画された。調査区周辺においては、平成元年度に本部車庫給水管改修に伴う立会調査[註1]が実施されている。同調査では現地表下約65cmまで掘削が行われ、造成土のみが検出されたが、造成土には黒色の粘質土ブロックが含まれており、弥生土器片が出土した。今回の掘削工事においても遺物の出土が予想されたため、立会調査を実施した。

調査の結果、現地表下12cmまでが表土で、以下12～40cmが造成土であり、埋蔵文化財に支障はなかった。しかし、造成土には遺物包含層ないし遺構埋土由来と考えられる黒褐色（10YR3/1）シルトが含まれていた。また、造成土中より弥生土器もしくは土師器と考えられる土器片1点が出土した。

調査区周辺の地下の状況には不明な点が多いため、引き続き注意が必要である。

【註】

1）河村吉行（1991）「本部車庫給水管改修に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』),山口